

クライ・ホド・ナド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造

井島 正博

はじめに

井島(二〇〇七・三)では、〈並列・添加〉系の副助詞、サエ・マデ・デモ・ダツテを分析した。本稿では、〈程度・例示〉系の副助詞、ホド・クライ・ナド・ナンカ・ナンテについて考察を試みたい。〈並列・添加〉系の副助詞は、いずれも当該対象以外にも同じ範疇に属する対象が存在することを含意するものであり、そのような意味特徴を〈並列・添加〉と呼んだ。そして、そのような意味特徴を持つことが、〈意外・極限〉という意味特徴を持つこととなることを理論的、実証的に跡づけた。すなわち、現実世界において複数の対象が〈並列〉している場合には、しばしばその背後の期待世界においてそれらの複数の対象間には〈実現可能性〉というスケール上の相違が想定される。その期待世界と現実世界とのギャップから、〈意外〉というような意味合いが生ずる

ことになるのである。

〈程度・例示〉系の副助詞は全体に共通する理論的な基盤というものはなく、おおよそ〈程度〉概念を共通にするクライ・ホドと、〈例示〉概念を共通にするナド・ナンカ・ナンテ(・ナゾ・ナンゾ)とに二分される。以下では、従来の研究に鑑みて、クライとホドとはそれぞれ節を改めて、ナド・ナンカ・ナンテ(・ナゾ・ナンゾ)はひとまとめにして同じ節で論じていくことにしたい。

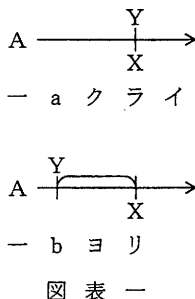
1 クライ

1・1 基本用法

クライが表わす程度の用法の原型を「YハXクライA」のようなものだと想定したい。すなわち、対象YはAという状態の程度において他の対象Yと同程度である、ということ

意味する。これは、対象YはAという状態の程度において他の対象Xに比べて程度が高い/低いということを意味する。「YハXヨリA」と対になるものである。

- (1) a 次郎は太郎くらい背が高い。
 b 次郎は太郎より背が高い。



これまでの研究では、クライ・ホド(および「程度」)の用法を、基準Yが常識的な程度よりも高いか低いかを問題にして、「非常の程度」「通常の程度」「同程度」(奥津(一九八〇・七)),あるいは「高程度」「低程度」「適当程度」「同程度」「不定程度」(丹羽(一九九二・一一))などを問題にするものがあつた。しかし、それは表現される内容世界の問題であつて、副助詞の意味・機能と直接関わる問題ではないと思われるので、ここでは特に取り上げない。ただし、確かにホドの基準は「高程度」に偏る傾向があるが、このことに関しては程度の高低を用法として区別することによって説明のつく問題ではない。このことに関しては、第2・3節で論じ

たい。

- (2) a 私は目を閉じてインカの井戸くらい深いため息をつき、それからまた『赤と黒』に戻つた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』553
 b フォルクスワーゲン・ゴルフくらいの大きさのひきがえるがやってきて私に口づけするまで、私はこんこんと眠りつづけるのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』560
 c ちようど、午すぎであつた。三原は庁内の五階食堂にはいつた。ここは地方のデパートの食堂ぐらいに広い。

松本清張『点と線』284

同程度であることを明示的に示す「同じぐらい」という表現も散見される。

- (3) a 人間の太り方には人間の死に方と同じぐらい数多くの様々なタイプがあるのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』36
 b スーツは仕立ての良いつるつるとした生地で、彼女の顔もそれと同じぐらいつるつるしていた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』30
 c 身なりのよい母親と小さな娘は二人で噴水を眺めていた。母親の年はたぶん私と同じぐらいいだろう。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1431
 d 男は栄二のほかに十四、五人、女たちも同じぐらい

たろうか。両者は左右にわかれて坐り、その中央に教師の席があつた。

山本周五郎『さぶ』 236

e 年があけた初夏に、次女かめが生れた。小陸の血瘤は、生れてきた子供の頭と同じくらい腫れ上がったしまつていた。

有吉佐和子『華岡青洲の妻』 356

その次に、比較基準となるYが、対象ではなく述語ないし命題で表わされる段階が考えられる。

(4) a 女の印象は不思議なくらい清潔であつた。足指の裏の窪みまできれいであらうと思われた。

川端康成『雪国』 26

b 私が乗ったエレベーターはごぢんまりとしたオフィスとしても通用するくらい広かつた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 12

c すこしばかり風が吹いていたが、それすら気持ちのいいくらい軟らかだつた。

堀辰雄『風立ちぬ』 173

d 「このまえも、年の暮の事してね、お互いもう、目が廻るくらいいいそがしいのに、いつも、年の暮をねらつて、こんな事をやられたひには、こつちの命がたまらな

い」 太宰治『人間失格』 224

e 上田敏訳のギイ・シャルル・クロオとかいうひとの、こんな詩句を見つけた時、自分はひとりて顔を燃えるくらいに赤くしました。

太宰治『人間失格』 175

f 「情死するくらい深かつた両人の関係を今さらほしく

る必要もなかつたが、念を入れたわけだ」

松本清張『点と線』 275

g 白眼の濁りも、一時的なものであつたかと思われくらい元気で、相変わらず飯もよく食つた。

阿川弘之『山本五十六』 1293

h 「二と言で言えば山本次官という人はお上手者でない。実際一種の変人ではないかと思われるくらいぶつから棒で無愛想で、むろん軍人は無愛想でいいのだけれども、あの人は群を抜いて徹底している。……」

阿川弘之『山本五十六』 519

ここから、スケールが数量的に計れるものになるのは一歩である。それでも、これらは「XハヤクライA」という構造は維持している。

(5) a ナオミの寝台は、日本間ならば二十畳も敷けるくらいな、広い部屋の中央に据えてあるのですが、それも普通の安い寝台ではありません。谷崎潤一郎『痴人の愛』 624

b 岩竹さんの顔は極度に腫れて倍くらいな大きさになり、臉を指でこじ明けなければ目が見えなくなつたので、担架に乗せてられて東の端の重症患者の教室に運ばれた。

井伏鱒二『黒い雨』 545

c 日本の魚雷ならば四五ノット以上も出すというのに、それはせいぜい三〇ノットぐらゐの速度しか出ていな

い。 吉村昭『戦艦武蔵』 430

d 三千元は、当時立派な家作が「軒買えるくらいの、大きい、無茶な賭け金であるが、「老岐」は沈み、山本は負けた。
阿川弘之『山本五十六』312

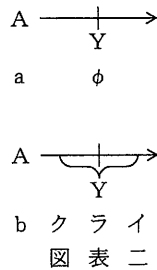
e 車は、あたらしい雪の降り積む道を、すべりどめの鎖をばりばりと鳴らしながら走った。凍った川をわたり、すぐ右へ折れて川沿いの坂道へかかる。車がやっと「二台通れるくらいの細道であった。三浦哲郎『忍ぶ川』72

さらにそこから、何らかのスケール上で、当該程度か、当該数量か前後であることを表わす「概言」用法が派生するのも見やすい。

1・2 「概言」用法（主に数量詞）

これまでの程度用法もXはYとほぼ同程度であるという意味で「概言」的と言うこともできるが、ここに見る「概言」用法はXにあたる対象が見出しにくい。単に当該数量を「概言」的に提示しているだけのように見える。すなわち、クライのない数量詞は丁度の数量、数量詞にクライが付加されるとその前後を含むおよその数量、というように了解される。

- (6) a 太郎は回転寿司を十皿φ食べた。
b 太郎は回転寿司を十皿くらい食べた。



しかし、これらの場合も、スケールAが「数量」、基準Yが数量詞、そして対象Xが数量詞を除いた命題となり、およそ「太郎が食べた回転寿司の数量は十皿（くらい）だ」のような意味であると考えると、基本用法の延長上に位置付けられる。この数量詞の問題は、特にホドの当該箇所ですく取上げたい（第2・3節参照）。

(7) a このとき、テレビの画面がかわり、二ニュースをお伝えします、という声といっしょに、三十歳くらいのアナウンサーの上半身がうつしだされた。

立原正秋『冬の旅』412
b 「バスがなかなか来なくてね。あの路線のバスは時間が正確でないから困るんです。二十分くらいは平気で遅れるんですからね」
松本清張『点と線』337

c しばらくは課の中は静かだった。三分五分くらいと課員は持場から離れて、それぞれ帰宅の用意をはじめた。
新田次郎『孤高の人』267

d 園子は嘗めるようにそのブドウ酒を飲んで見た。甘か

った。酒という感じではなかった。「外国人の女の人は、そのコップに三ばいぐらいは飲むんですよ」

新田次郎『孤高の人』677

e 塩せんべいを日本でたべれば、一枚五円にもならないが、ギリシャあたりでたべようとすると、フランクフルト・ソーセージと同じことで一枚五百ぐらいになってしまう。

井上ひさし『ブンとブン』131

数量詞十クライという形で、事実の描写に用いられるだけでなく、次に見る〈行為評価〉用法としても用いられる。その場合、セメテ、くナラのような形がしばしば見られることから知られるように、当該行為を低く評価する意味合いを持つ。

(8) a 「おれも安心する。その場で宗旨の禁制をやぶつても、自殺して、おまえといっしょに墓の中にはいりたい。」
「比翼塚、「さつそく、そういうことにしよう。」「まだすこし早すぎるわよ。せめて、三日ぐらいは猶予してよ。」

石川淳「かよい小町」357

b 太郎はできれば、狭いアパートには住みたくない。せめて、本が二百冊ぐらいは置ける空間をほしい。

曾野綾子『太郎物語』660

c 「三十万円ぐらいあれば、あと手持ちが三十万円あるから、なんとか店がひらけるそうですが……」

立原正秋『冬の旅』537

d 会議室はせいぜい五十人ぐらいがせいじっぱいのところだったが、そこに七十人ばかりの男たちが集まって藤の話に熱心に聞いていた。新田次郎『孤高の人』686

e 一生を北海道に暮らす気はないが、四年や五年ぐらいなら任んでみてもいいような気がした。

三浦綾子『塩狩峠』362

1・3 〈行為評価〉用法

クライには、(9) a ~ e のように、難／易、複雑／簡単、高価／安価、高い敬意／低い敬意など、人の行為に対する評価に用いられ、当該行為を低く評価する用法が存在する。

(9) a 小学生の算数ぐらい楽に解けなくてどうする。

b ウィスキーはだめだけど、ビールぐらい飲む。

c 八百屋のお遣いぐらい買ってくれ。

d 授業のテキストぐらい買ってくれ。

e 道で会ったら挨拶ぐらいしたらどうだ。

その背後に存在するのは、井島(二〇〇七・三)で並列・添加系と呼んだモ・サエ・マデ・デモ・ダツテの分析に用いた(実現可能性)と近似した概念であるように思われ、現に安部(一九九・一〇)では、クライの背後にある意味・特徴を(実現可能性が高い)というものであると分析している。また、田中(二〇〇三・三)では、どのような程度かは明確

にすることなく、「典型的には程度の低さを強調するという話し手の感情的評価を示す」と論じる。しかし、結論から言えば、どのような呼称を与えるかはさておいて、少なくともクライの背後にあるのは、モ・サエ・マデ・デモ・ダツテの背後にある概念と同じものであるとは言い難い。とりあえず、「実現可能性」と區別して、クライの背後にある概念を（行為評価）と呼び、以下で、その特徴、および「実現可能性」との相違に関して考察したい。

まず第一に、「行為評価」のクライが用いられる述語は、原則として、人間の行為を表わす。確かに、純粹な人間の行為以外にも、自然現象(10 a)や、偶発的現象(10 b)などにも、「行為評価」のクライが用いられることはある。

(10) a? 雨くらい降つてくれてもいいの。

b? 初詣の時くらい大吉が出てくれないかな。

しかし、その場合も、いわば当該現象を惹起する超越的存在に対して訴えかけているようなニュアンスが感じられるのではないだろうか。実際、このような用法は、命令・願望等に用いられることが多い。いわば、当該述語は臨時的に超越者の行為を表わすものとして用いられていると了解できる。ちなみに、これらの現象が、他の現象よりも「実現可能性」が高いと説明するのはかなり強引である。

第二に、「行為評価」のクライが用いられる文は、全体として、単なる事実の描写ではなく、依頼・命令・助言・勧誘

・意向確認・行為に関する質問・行為に関する主張・不満表明・可能・希望・願望など、何らかの意味で、行為を促したり、望んだりするような表現となる。たとえば、(11) a ~ c に見るように、命令・質問あるいは断定文でも行為に関する主張には用いられるが、(11) d のように、単なる事実の描写には用いられない。

(11) a ワイシャツくらいアイロンをかけなさい。

b ワイシャツくらいアイロンをかけてる？

c ワイシャツくらいアイロンをかけているよ。

d ?? 太郎はワイシャツくらいアイロンをかけていた。

これも単なるかえって事実の描写に用いられる傾向のある「実現可能性」から、そのような表現に用いられることを説明することは困難である。

また、第三に、「行為評価」のクライが用いられる文は、

およそ(12) a ~ d のように、「なんでもない」「わけはない」「大したことはない」のように、当該行為を低く評価する意味合いを持つ。

(12) a 大ていの母親は、かなり生活が苦しくつたつて、息子
が大学へ入るか入らないかの境目には、保険金のつもり
で、使わないかも知れない入学金くらい払つてくれるも
のなのだ。 曾野綾子『太郎物語』546

b 「今、お宅では、それは、それは、子供達のことを心配していらつしやるから、居場所くらいは明かしてお

なければいけません」

曾野綾子『太郎物語』 410

c 「少し休まなくてはいけないわ、あたしのうちへゆきましよう」とおすえが云った、「下谷の金杉かねすぎで筆屋をやっているの、狭いけれど栄さんの寝るところぐらいいはあるわ」

山本周五郎『さぶ』 149

d 艦長あたりからそんな風に言われると、近江はやはり、封を切らない赤い「ジョニー・ウォーカー」の一本くらは、届けないわけにはいかなかったという。

阿川弘之『山本五十六』 839

（行為評価）を表わす場合に、(13) a & d のように、クライナラが用いられる場合がある。ここからナラを除いて、クライナラとしても不自然ではない。逆に、先の(9) a & e、(12) a & d にナラを加えて、クライナラとしても不自然ではない（クライナラはハをとってクライナラとするか、クライナラバとすればよい）。このことも、他の行為と比較して、当該行為を低く評価する意味合いを持つことの一つの証左であろう。

(13) a 山本は淵田に、攻撃開始時刻のことで、質問をした。

淵田が、五分早くなった事情を説明すると、山本は、「まあ、五分くらいなら、仕方がないだろう」と言った。

阿川弘之『山本五十六』 1035

b ひと騒ぎおえて、大先生が私に言った。「おい、君、わしにロシア語を教えてくれ」教えるほど達者なわけはない。だが簡単な挨拶ぐらいいなら、何とかなる。

五木寛之『風に吹かれて』 309

c ビールとハンバーガーくらいならなんとか胃にもぐりこませることができるともかもしれない。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 628

d 「そうですとも——あ、ワインが来ましたよ。一つ、乾杯しようじゃありませんか」「でも——」「まあ、ワインぐらいいなら大丈夫でしょう。さあグラスを持って」

赤川次郎『女社長に乾杯！』 84

また（行為評価）が低いことに関しては、セメテ・セイゼイ・少ナクトモなどの副詞句と共起する例も散見されることから支持される。

(14) a 二年間も英語を習い、リーダーの三が読めるのですから、せめて過去分詞の使い方や、パッシヴ・ヴォイスの組み立てや、サブジャンクティヴ・ムードの応用法ぐらいいは、実際的に心得ていい筈なのに、和文英訳をやらせて見ると、それがまるきり成っていないのです。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 106

b 「せつかくここまで漕ぎつけたものだから、せめて口マぐらいいにはおまえをつれて行ってやりたい。」

石川淳一『かよい小町』 369

c 「せめて、アーミーの暗号を読んだのか、ネイビーの暗号を読んだのか、それぐらいいは教えてくれてもよくはないか」

阿川弘之『山本五十六』 1381

d 「どうやら、危険を怖れすぎたようだ。これからも時々、せめて日光浴をする楽しみぐらいいは許してもらおう」

遠藤周作『沈黙』92

e 「行かないでくれ。生原稿の中にもどれとはいわん。せめて、この家の中でひっそりとくらすぐらいにしてほしい。このとおりだ」

井上ひさし『ブンとブン』36

f 社長ともなると、こんな所に女を囲っておくこともできるのか、と荒井はため息をついた。俺など、女房子供で手一杯なのに……。まあ、俺も部長にはなつたが、せいでい小鳥の一羽ぐらい飼うのがいいところだろう。

赤川次郎『女社長に乾杯!』209

g いままでいつも好意的であつた専売局長の賀来佐賀太郎は、総務長官に昇進していた。以前には民政長官と称せられていた官職で、台湾では総督につぐ地位である。彼にすればなんとか解決がつくはずであつたし、少なくとも事情ぐらいいは説明してくれるだろう。

星新一『人民は弱し官吏は強し』283

h 「何で、金閣寺が太宰治なんだ」「だってさあ、何だか、そう思ってみると、そう思えて来ない?」「私は、少なくとも明日ぐらいいまでは、これを思い出す度に笑えるわね」

曾野綾子『太郎物語』27

また、クライシカ、クライシテモ・タツテのように、しばしば限定、譲歩表現中で用いられることも、(行為評価)

が低いことを支持するだろう。

(15) a 城壁ぐらいいか自慢できるものはないのだが、これもほかの町のとくらべてとくにこれといった特徴をあげることはできない。

開高健『流亡記』430

b そして太郎は、こういう人間に会うと、この頃は少しばかりほつとするのである。皆がこれぐらいいか努力しないなら、自分は、喫茶店をやつても食つて行ける、と思つてしまうのである。

曾野綾子『太郎物語』802

c 「菅野、今日はとてもいい日だ。患者さんが落ちても怪我ひとつしない。これは君ねえ、奇跡だよ。自動車に穴ぐらいいあいたつてなんでもない。いや、今年はとてもいい年になるよ」

北杜夫『榆家の人々』211

さらに実際、(16) a & d のように、明示的に「なんでもない」「わけはない」「大したことはない」「不都合はない」で結ぶ用例も見出される。

(16) a 栄二は着物をひろげてみて、きれいだなど云つた。これだけ大きな資産家の娘なら、京染めの友禅ぐらいいなんでもないだろうに、わざわざ人を呼んで見せるところに、この姉妹の気取らない、下町っ子らしい開放的な性質がよくあらわれていた。

山本周五郎『さぶ』39

b 田舎巡査の一人や二人、まるめこむぐらいいわけはない。

安部公房『砂の女』147

c 学校を出てから十年近く、ほとんど運動らしい運動を

していなかったが、走ることくらい大したことではないと思っていた。 沢木耕太郎『一瞬の夏』 1043

d 「楽器というものは原則としてこの街には存在しない。」と彼は言った。「しかしまったくないわけではない。

あんたも真面目に仕事をしていることだし、楽器くらい手に入れてもべつに不都合はなからう。……」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 883
このように「なんでもない」「わけはない」などのような意味合いが生ずることも、〈実現可能性〉の低さから説明することは困難である。

第四に、〈行為評価〉のクライが用いられる文は、クライが下接した要素のみを他の対象と比較して低く評価する「要素対照」ではなく、クライが用いられた命題全体を他の命題と比較して低く評価する「命題対照」を表わす（従来「スコープ」と呼ばれたもの）。これも、このクライが〈行為評価〉を表わすということからすると当然の帰結である。すなわち、行為とは、あるモノではなく、あるモノを用いて何かをするコトなのであるから、命題全体が当該行為にあたるはずである。

以上のように、クライには〈行為評価〉用法があり、それは〈実現可能性〉というものとは異なるものである、ということは認められるのではなからうか。では、どのような経緯でクライが〈行為評価〉に用いられるようになったのか、言

い換えればクライの基本用法である程度用法からどのようにして〈行為評価〉用法が派生したのか、について考えてみたい。

並列添加系副助詞が〈意外〉の意味合いを表わすことについては、次のように説明できた。

まず、発話時に並列添加系副助詞を用いて〈意外〉表現をする心的過程は以下のようなものであろう。まず発話以前に心の中（期待世界）で、〈実現可能性〉の高い事態Qは生起し、〈実現可能性〉の低い事態Pは生起しないと思っていた。しかし、現実には（現実世界で）、QだけでなくPも生起した。このP、Qともに生起するところに並列添加系副助詞が

用いられる契機があり、期待世界と現実世界とのギャップから〈意外〉の意味合いが生ずると考えることができる。また、歴史的に並列添加系副助詞に〈意外〉用法が派生した経緯は次のように考えられる。本来、並列添加系副助詞は、複数の対象が同じ特徴を持っている、あるいは同種の複数の事態が成立していることを表わす〈並列・添加〉用法を持っていた。複数の対象が同じ特徴を持っているということは、しばしばそれら対象間には、その特徴が二値的でない程度の相違が見出され、それらの対象はその特徴の程度差によって比較することが可能である。同じように、複数の事態が同種であるという場合、それらの事態はその意味特徴の程度差という形で比較する余地が生ずる。対象であれば大小、軽重、

美醜などさまざまな意味特徴で比較することができるであろうが、事態間に適用できる最も一般的な比較基準は〈実現可能性〉というスケールであろう。ここで、現実（現実世界で）実現した、あるいは実現しなかった事態に関してはおもや〈実現可能性〉を云々することはできないのであるから、〈実現可能性〉というスケールが存在するのは、心の中にある期待世界であることになる。このように、現実世界においては複数の事態の〈並列・添加〉を表わす一方で、期待世界ではそれらの事態の間に〈実現可能性〉の程度差があると思つていたことを表わすわけであるから、そのギャップから〈意外〉の意味合いを表わす用法が生じたものと考えられる。

ここで、並列添加系副助詞の〈意外〉用法の背後にある表現の構造を確認しておく、〈意外〉用法であっても、本来の現実世界における〈並列・添加〉の意味・機能は保持されており、それに期待世界における〈実現可能性〉の程度差が上乘せされた構造をしていることになる。そして、並列添加系副助詞が用いられる根拠は、あくまで現実世界における複数事態の並列関係にある。すなわち、並列添加系副助詞の〈意外〉用法は、現実の事態を描写する表現にしか用いられない。さらに、歴史的に並列添加系副助詞の〈意外〉用法が成立したのは、現実世界の〈並列・添加〉の意味合いから、期待世界の〈実現可能性〉の程度差が派生したことによるのに対して、発話の場で〈意外〉用法が用いられるのは、前もって期

待世界で〈実現可能性〉の程度差を持っていた複数の事態が、現実世界でも実現した（並列）ことによる、というように展開の方向が逆になる。

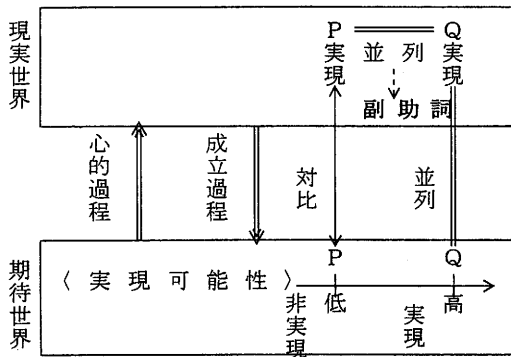


図 表 三 並 列 添 加 系 の 表 現 機 構

これとクライの〈行為評価〉用法を対比しつつ見ていきたい。

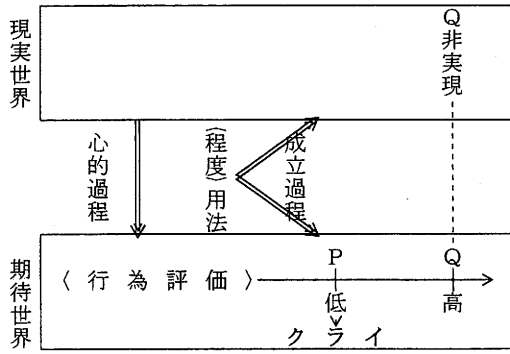
まず、発話時にクライを用いて〈行為評価〉表現をする心的過程について考えてみたい。何の理由もなく最初から〈行為評価〉の低い行為の実現を求めるといふことはあまりあり

そうにない。多くの場合、現実（現実世界で）〈行為評価〉の相対的に高い行為Qが実現されなかったことを受けて、期待世界においてそれよりも〈行為評価〉の低い行為Pが実現されることを望むような場合に〈行為評価〉のクライが用いられると考えられる。たとえば、「ウイスキーが飲めない」ことがわかっている人物に対して、それよりもソフトな「ビールを飲む」ことを望むような場合、病気がちで「走ったりできない」人物に対して、もう少し楽な運動として「散歩をする」ことを勧めるような場合に、「ウイスキーくらい飲みませんか」とか、「散歩くらいしたらどうですか」のように〈行為評価〉のクライを用いる。

また、歴史的にクライに〈行為評価〉用法が成立した過程は、以下のように推測できる。クライの基本的な意味・用法として、もともとスケールの性質をもつ〈程度〉用法が存在した。この〈程度〉というスケールは、現実世界に適用できることは勿論であるが、期待世界にも適用できるものである。並列添加系副助詞の場合、期待世界における事態のスケールとして〈実現可能性〉が採用されたが、〈行為評価〉も期待世界における事態のスケールの一つと考えられる。すなわち、難／易に代表される〈行為評価〉は話し手自身の心の中で行われるものであろう。そして、その〈行為評価〉も〈程度〉の一種に過ぎない。〈程度〉が期待世界の事態間に適用されたとき、〈行為評価〉用法が派生するのには、それほど困難

はないように思われる。

〈行為評価〉のクライの表現構造を考えてみると、クライという副助詞が用いられる根拠は、期待世界に位置付けられる〈行為評価〉という一種の〈程度〉スケールにあるものと思われる。すなわち、〈行為評価〉のクライは、事実を描写する文には用いられにくく、何らかの行為の実現を求めるような表現に用いられることになる。そして〈行為評価〉のクライが用いられるのは、多くの場合、やはり現実世界との関わりにおいてであるが、並列添加系副助詞のように現実世界の事態の有様と期待世界の事態の有様とが対比関係をなしているのではなく、現実世界で実現されなかった行為よりも、低く評価される行為が実現されることを望むという期待世界の有様が表現されるというような関わりの方である。また、〈行為評価〉のクライが成立したのは、歴史的過程というほどのものではなく、単に〈程度〉用法が期待世界において事態間の関係に用いられたことによると考えられる。発話の場における心的過程は、並列添加系副助詞の〈意外〉用法とはむしろ逆に、現実と比較的〈行為評価〉の高い行為が実現されなかったことを受けて、期待世界でそれより〈行為評価〉の低い行為が実現されることを望むという方向性を持つ。



図表四 クライの表現機構

ちなみに、井島(二〇〇七・三)において、並列添加系のモ・サエ・マデ・デモ・ダツテのいわゆる意外・極限用法は、期待世界において(全実現可能性)というスケール上で(実現可能性)が低いと判定された事態が、現実世界で生じたことの認識的ギャップを表わすものであると論じた。

それと比較すると、クライの表わす(行為評価)は、命題で表わされる事態に関するものである点では並列添加系副助詞と同じであるが、第一に、並列添加系副助詞のように期待

世界と現実世界とを対照するものではなく、あくまで期待世界に限られている、第二に、並列添加系副助詞が(意外・極限)を表わす場合は、あくまで現実世界で(並列添加)という機能を果たしている(マデだけは異なる)が、クライが(行為評価)を表わす場合は、もっぱら期待世界で働く、という点で並列添加系副助詞とは異なっている。

1・4 比較用法

ところで、クライナラには、(低評価)用法の他に、二つの事態を比較して、ナラでとりあげられた前件よりも後件の方が優っていることを表わす用法がある。その際、単に二つの事態が比較されているだけではなく、しばしば前件は現実の事態、後件はそれよりも望ましい事態がとりあげられ、恨みや、後悔、希望などのニュアンスが伴うことがある(17) e) h)。

(17) a 公約を破って連載を中絶したということは、わたくしにとつては、切腹にひとしい気もちであります。かわりの作品が書けるくらいならば、なんで「路傍の石」の筆を折りましたよ。 山本有三『路傍の石』786

b 中途半端に考えをめぐらすくらいなら、何も考えない方がすつとマシだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』633

c スーツケースは重すぎるし、ボウリングのボールケースを持つくらいならこのままナイキのバッグを持つていた方がずつとましだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1256

d ^{たんす} 筆筒を買えばよかったです、そう云うお金があるくらいなら、少しでも余計衣裳を買いたいし、それに私たちの趣味として、何もそんなに大切に保存する必要はない。

谷崎潤一郎『痴人の愛』96

e あれから、おばあさんはどうなったかしらと、吾一は心配していたのだが、うちに帰ってこられたくらいなら、おそらく、たいしたことにはならなかったのだろう。

山本有三『路傍の石』546

f 「やあ、すまない。すまない。」はしご段の上で、だが私がそう言っているが、あたまの上にふとん包みが二つものつていては、上の人の顔なんか、とても見られなかった。「すまない。」と言うくらいなら、上の包みだけでも引っぱってくれればいいのに、上の人はただ笑っているだけで、ちつとも引っぱりあげてくれるようすがなかった。

山本有三『路傍の石』313

g その船には、日本の乗客が二十三人いたが、その日本人たちは、ことごとく潮死てきししてしまった。お客がみんな死んでしまったくらいなら、船員もひとり残らず、海底に沈んだものと、だれでも思うだろうが、その時、船長

以下、イギリスの水夫二十六名は、つががなく助かっているのである。

山本有三『路傍の石』95

h 「矢部姓を継ぐんですって」澄江は、矢部という姓をくちにしたとき、ちよつとくちもつた。「矢部家に戻るくらいなら、小田原にきてくれてもいいじゃないの」

立原正秋『冬の旅』1023

このような用法も、(行為評価)用法の延長上に位置付けることができるだろう。すなわち、クライでとりあげられる事態を低く評価するという意味合いは保持され、あたかもAハBダという名詞述語文の、A、Bに命題P、Qが代入されると、PノハQノダという形のノダ文の分類が生まれるように、YクライナラAダのY、Aに命題P、Qが代入されて、PクライナラQというこの構文が生まれたと考えることができる。

2 ホド

2・1 ホドの基本的意味

副助詞のホドも、その語源である「程」の程度の意味からまだそれほど隔たつてはおらず、YハXホドA (Aは状態述語) という形式で、XでAというスケール上のある(多くは高い)値を示すのが基本的な意味であることには、異論は出

ないだろう。

実際の用例を見てみると、ホドは、クライと比べると、対象をとる用例は思いの外少ない。そのような中でも、対象をとるものを探し出してみると、まず中立的に程度の大小に関して特別な含意を持たない比較の基準を表わす一群がある。これらは、どうやら程度でも、大きさ、高さなどに偏るようである。このホドは、クライに置き換えることができるが、かえってクライに比べて若干古い用法のようにも感じられる（クライの用例の出典と比較しても、こちらの出典はやや時代が古い）。

(18) a 正面より見れば生れ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば存外小さしと云へり。御犬のうなる声ほど物凄く恐ろしきものは無し。 柳田国男『遠野物語』47

b 半月ばかり見ないうちに、家々は最早冬籠の用意、軒丈ほどの高さに毎年作りつける粗末な葦簾の雪がこいがすつかり出来上っていた。 島崎藤村『破戒』369

c 川はその向うに、一条の鋼鉄の線をなして横わり、風景を切つて遽だしく滑っていた。対岸は多摩の横山ほどの高さの丘陵が、やはり淡い草の緑を連ね、流れを遡つて右へ右へと退いて行った。 大岡昇平『野火』28

d 或る夜、火は野に動いた。萍草や禾本科植物がはびこつて、人の通るはずのない湿原を貫いて、提灯ほどの高さで、揺れながら近づいて来た。大岡昇平『野火』241

e かれらは頭に羽毛でかざった大きなボンネットのようなものをかぶっています。耳には掌ほどの大きさのある骨の玉をかぶせています。 竹山道雄『ビルマの竖琴』299

f ブインから飛行機で、ほんの五、六分南に飛ぶと、シヨートランドという淡路島ほどの島で、そのすぐ東にほとんど飛行場だけの小島バラレがある。 阿川弘之『山本五十六』1299

そのように単純に比較の基準を表わすものが若干あるもの、それ以外の大多数の用例はむしろ何らかの程度が甚だしい比較の基準にホドがつく。それが肯定文の中で用いられれば、対象Yそのものが比較の基準Xと同じく、程度が甚だしいことになる。

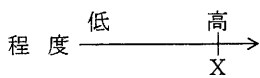


図 表 五

(19) a 詩を書いていたところで、一生うだつがあがらないし、

第一飢えて干乾しになるより仕方がない。私が、栗島澄子ほどの美人であるならば、もつと侍せな生き方もあったであろう……。

林芙美子『放浪記』700

b そしてじつさいオツベルは、そいつで上手に腹をへらし、ひるめしどきには、六寸ぐらいのピフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。

宮沢賢治「オツベルと象」203

c 残された善術、こっそり押入れをあけると薄い布団が二枚、下段に猫の食器ほどに粗末な茶碗と小皿があるだけ、二人で篠原に暮していた時の行李、洋服箱の姿もない、

野坂昭如「焼土層」194

d 玄関開けると、きぬにくらべて親娘ほどにも若い女が、「あらあらいらつしやい、さあ疲れたでしよ、心配してたのよ」出迎えて、それがあたらしい母であった。

野坂昭如「焼土層」188

場合によっては、対象Yと程度の甚だしい比較の基準Xとが分かれることなく、対象Yそのものの程度が甚だしいことがホドによって表わされているものも見られる。この場合、対象Yそのものの程度の甚だしさが周知のものである必要がある。

(20) a もし老師ほどの高僧が、新来の旅僧のこのような修行の形を真似ているなら、その謙虚さはおどろくべきものがあつた。

三島由紀夫『金閣寺』510

b 張柏端ほどの仙術の達人でも、さあ出かけようといふまぎわになつて、たしかに玄関に置いてあつたはずの沓が見えなくなつてにはちよつとこまつた。

石川淳「張柏端」244

c このころより、家斉ほどのvet galantも、氣力にわかにおとろえ出して、翌天保十一年の秋には中風の床にたおれ、越えて明年、天保十二年閏一月三十日、行年六十九をもつて死んだ。

石川淳「喜寿童女」624

しかし、一般的に、対象Yそのものの程度が甚だしいことよりも、対象Yは程度の甚だしい比較の基準Xに及ばないことの方が多いだらう。すなわち、程度の甚だしいことを表わすホドは否定的環境の中で用いられることが多い(21) aの「少ない」も一種の否定表現と見ておく。

(21) a 信州人ほど茶を嗜む手合も鮮少かろう。こういう飲料を好むのは寒い山国に住む人々の性来の特徴で、日に四五回ずつ集つて飲むことを楽しみにする家族が多いのである。

島崎藤村『破戒』79

b 仁太だどていのちのおしさについては、人後におちるはずがない。それを仁太ほど正直にいったものは、なかつたかもしれぬ。かれはかつての日、徴兵検査の係官のまえで、甲種合格と宣言されたせつな、思わずさけんだという。「しもたあ！」みんながふきだし、うわさはその日のうちにひろまつた。

壺井栄『二十四の瞳』329

c 「…ひとには道楽者みたいに思われて、あたしほど不
仕合せな人間はありません。」とさめざめと泣いて見せ
たことがあるそうで、
石川淳「葦手」 129

d 河井継之助の名は勝海舟ほど知られていないから、
これは解説を要すると思うが、河井は、謂わば長岡藩の
勝海舟であった。
阿川弘之『山本五十六』 110

以上では、ホドが対象をとる例をもとに議論してきたが、
むしろホド句は述語をとる例の方が圧倒的に多い。こちらに
は、中立的な比較の基準を表わす例は、決して少なくない。

(22) a 「駅長さん、弟をよく見てやって、お願いです。」悲
しいほど美しい声であった。高い響きのまま夜の雪から
木魂こだまして来そうだった。
川端康成『雪国』 7

b そのとき、発車寸前の電車の左側三メートルぐらいの
ところに、目もくらむほど強烈な光の球が見えた。

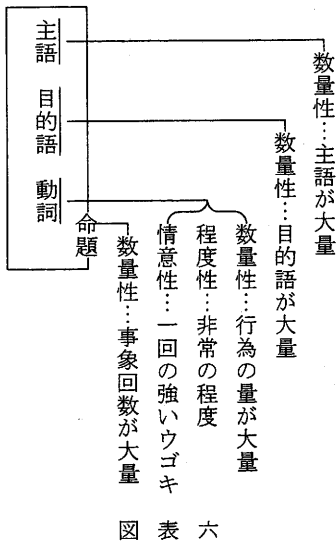
c もともと生活の苦勞はなく、自宅には暗室を設けるほ
ど好きな写真のほかには道楽といつては玉突きぐらいで、
井伏鱒二『黒い雨』 68
石川淳「マルスの歌」 202

2・2 数量を中心とする補文をとるホド

井本（二九九九・一〇）では、ホド句（ホドで結ばれた連
用修飾句）が文中のどの部分を修飾するか、どのような修飾

のしかたであるか（数量か、程度か、情意か）によって、（目
的語が大量）（主語が大量）（事象回数が大量）（行為の量が
大量）（非常の程度）（一回の強いウゴキ）の六類に分類して
いる。

- (23) a お腹を壊すほどアイスクリームを食べた。 目的語が大量
b 庭を埋め尽くすほど花が咲いた。 主語が大量
c 背中が赤くなるほど次郎を叩いた。 事象回数が大量
d 病気になるほど働いた。 行為の量が大量
e 見違えるほど痩せた。 非常の程度
f 血がにじむほど嘔んだ。 一回の強いウゴキ



この議論は、それまでホドは（程度）という概念で分析す

るのが当然であるような議論が展開されてきたことに対し、一度立ち止まってそのことを吟味し直すべきことを要求しているように思われる。ここで、ホド句を程度副詞「随分」と置き換えてもそれほど不自然とは感じられない。

(24) a 随分アイスクリームを食べた。

b 随分花が咲いた。

c 随分次郎を叩いた。

d 随分働いた。

e 随分痩せた。

f 随分噛んだ。

程度副詞は、何らかのスケールを背景に持つ状態概念を修飾することを本性とするはずである。何らかのスケールを背景に持つ状態概念という点では、数量詞もそこに含めることができる。そこで、何らかの数量を修飾する(25) a ~ d には「たくさん」、そうでない(25) e・f には「ひどく」「強く」を「随分」の後に補ってみても、文の自然さはそこなわれない。ただし、(25) e の類は、「非常の程度」と呼ばれているように、そこで用いられている動詞「痩せる」「太る」「疲れる」そのものが何らかのスケールを背景に持つ状態概念を含んでおり、あえて形容詞や副詞のような状態述語を補う必要はそもそもない。

(25) a 随分たくさんアイスクリームを食べた。

b 随分たくさん花が咲いた。

c 随分たくさん次郎を叩いた。

d 随分たくさん働いた。

e 随分ひどく痩せた。

f 随分強く噛んだ。

以上のことから、逆に程度副詞に修飾されたある種の状態述語は省略可能である、ということがわかる。しかるに、程度副詞によって修飾されうる状態概念には様々なものがあるはずである。それが、省略可能なものは、およそ対象や動作、事態の数量や、動作の強度に限られるということは何を意味しているのだろうか。言い換えれば、(24) a ~ f が(26) a ~ f のような意味(「」で囲んで意味を表わす)にならないのはなぜなのだろうか。

(26) a 随分おいしくアイスクリームを食べた

b 随分美しく花が咲いた

c 随分上手に次郎(の肩)を叩いた

d 随分楽しく働いた

e 随分綺麗に痩せた

f 随分優しく噛んだ

しかし、もしこのように様々な解釈の可能性が開かれていたら、一体どのような意味であるのか決定することは不可能少なくとも非常に困難なことになるだろう。そうならないためには、常に状態述語を補うようにするか、状態述語がない場合には特定のステレオタイプの意味で解釈するようにす

ればよい。そのうち後者のスレテオタイプの意味が、対象や動作、事態の数量や、動作の強度であると考えられる(近年の新グライス派の議論では「I推意」と呼ばれている)。

さて、ホド句に戻れば、この場合も程度副詞と同じく「たくさん」「ひどく」「強く」などを補うことが可能である。

(27) a お腹を壊すほどたくさんアイスクリームを食べた。

b 庭を埋め尽くすほどたくさん花が咲いた。

c 背中が赤くなるほどたくさん次郎を叩いた。

d 病気になるほどたくさん働いた。

e 見違えるほどひどく瘦せた。

f 血がにじむほど強く嘔んだ。

このことは、ホド句は、〈程度〉を表わすとする従来の議論が間違つてはいないことを示唆している。

実際、確かに状態述語のないホド句の例は、次のように多く見出すことができる。

(28) 〈目的語が大量〉

a 「ウイスキー・ボンボンはキャラメルほど売れないんだ。だからつくらなかつたのさ。それまでのことだ」

開高健 「巨人と玩具」 194

〈主語が大量〉

b 二月下旬だから鴨も堤に群れていたが、都鳥は何百羽か何千羽の数かわからないほど群がっていた。

井伏鱒二 『黒い雨』 651

c 傘の表面には、指で字が書けるほど、砂がつもっていた。
安部公房 『砂の女』 51

〈事象回数大量〉

d 田代さんは老人だが、奥さんはまた若くて美しかった。

お嬢さんも学齢前で可愛らしかった。もしその骨を探していて死体が見つかったら、田代さんの脳裏に刻まれている二人の面影が、一瞬にして毀れるのを怖れているのではないだろうか。なぜかと云うに、ここ数日間にわたって、田代さんも僕と同じく、圧死者や半焼けの腐乱死体を見すぎるほど見ている筈だ。井伏鱒二 『黒い雨』 362

〈行為の量が大量〉

e 「まあ、聞きねえ。おれのおやじは、おれが言うのも

おかしいが、ひと一倍はたらいた。朝はやくから、よる

おそくまで、それこそ人間として、これ以上はたらけね

えってほど働いた。…」 山本有三 『路傍の石』 762

f 「妹のやつもその気は充分あつたんだがなあ、なにしろ猛烈にくすぐつたがってげらげら笑いだしやがるんだ。それでおれも腹の皮がひきつるほど笑っちゃったよ。」

倉橋由美子 『聖少女』 264

〈非常の程度〉

g 「そのお手紙をお富が読みましたら、誰も彼も一度に声を立って泣きました。あれの父は男ながら大声して泣くのです。あなたのお母さんは、気がふれはしないかと

思うほど、口説いて泣く。…」

伊藤左千夫『野菊の墓』110

h 頭が妙子の膝にぶつかつたのであわてて起きようとしたはずみに、その膝に乗っていた手の上にこちらの手を

ぎゅっと押しつけてしまったので、顔が赫となるほどうろたえながら手を引きかけたが、石川淳「葦手」76

i そのときかすかに揺れたかと思われた京子の姿に近寄る間もなく、うしろから脊椎にひびくほど押し迫るもののはいにふり返ると、善作がそこに立っていた。

石川淳「山桜」173

j よく見ると、牡丹花の雨に打たれて色のにじみ出たよ
うな赤い斑点である。それを一目見るや、あつと息をの
んで、たちどころに息絶えるほどに、総身氷つて戦慄し
た。お畏るべき記号である。疑いようもなく、これは癩の
兆候よりほかのものではない。石川淳「かよい小町」342

〈一回の強いウゴキ〉

k 「血のめぐりの悪いくせに怒ってんのよ。このあいだ
お座敷に来て、いやと言うほどつねるのよ」

松本清張『点と線』9

その一方で、状態述語が補われた例も、それほど多くはないとはいふものの、少なからず見出すことができる。それほど多くないといふことは、ステレオタイプのな意味は状態述語がなくても導出されるために、状態述語を補うことはかえ

って情報量の少ない冗長な表現になりやすいということを示唆しており、例外的で不自然な用例であるということではなからう。

(29) 〈目的語が大量〉

a ピンク色の洋服は、せいの高い、肉感的な長い両腕をムキ出しにした太った女で、豊かなと云うよりは鬱陶しいほど沢山ある、真つ黒な髪を肩の辺りでザクリと切つて、… 谷崎潤一郎『痴人の愛』220

b 夜のあいだに降つた大雪がこれまでにないほどの多くの獣たちを殺したのだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1045

c 飛躍と不器用、この相反する異質なものどうしを結びつけるとなると、悲しくなるほどの多量のエネルギーを注ぎこまなければならなくなる。

星新一『人民は弱し官吏は強し』66

d ベルトコンベアで流される餌をせっせとつつつては水を飲んで、すごいスピードで大きくなり、ころころと正気の沙汰とはおもえないほど卵をたくさん生んだり食用肉になつたりしている鶏の群れをみて、あたしは笑いこけずにはいられませんでした。

倉橋由美子『聖少女』99

〈主語が大量〉

e 日本じゅう、いたるところにたてられたこの緑の門を、

かぞえきれぬほどたくさんのわかものたちがぐぐりつづけて、やむことを知らぬような昭和十六年、戦線が太平洋にひろがったことで、歓呼の声はいつそうはげしくなるばかりだった。

壺井栄『二十四の瞳』327
f 街全体がバチンコの潮騒と二本脚で泳ぎまわる磯い魚の群れにみちた猥雑の海だった、そしてエーゲ海の島の数ほども多い島々がぼくの漂着を待っていた。

倉橋由美子『聖少女』410
g 彼らはちよつと教えきれないほどたくさん集まり、甲高い声で小学校のようにさわぎつつ食事をしていた。

開高健『パニック』79
h 風の音を聞いた。突風だなど思った瞬間、彼は背を低くして、風にこたえる体勢を取った。眼の前が混雑した。白くふわふわした、それでいてたとえようもないほどの多量の物体が、よこぎつていった。視界をおおいつくした。

新田次郎『孤高の人』655
i 「おれたちは五年生だ。もうすぐ卒業だからいいが、きみたちはたいへんだな」野口がたいへんだなどといった言葉の中には痛々しいほどの多くの示唆が含まれていた。

新田次郎『孤高の人』102
(事象回数が大量)

j 男が眼を動かさず動かさぬうちに、娘はやさしい手つきで直してやっていた。見ている島村がいら立って来る

ほど幾度もその同じことを、二人は無心に繰り返していた。
川端康成『雪国』12

(行為の量が大量)

k 地図遊びに出発する前に、地図を空暗記するほどよく研究して置けば、道にも迷わないだろうし、いちいち人に訊かないでもいいだろう。
新田次郎『孤高の人』87
(非常の程度)

l 彼は、呼吸もできないほど強い西風をまともに受けながら、雷鳥沢へ向っておりていった。

新田次郎『孤高の人』658
m それまでの常識では、主砲を発射する前にボート類の中に水を張って固縛したりして、爆風による破損を防いでいたが、第二号艦に発生する爆風は、そのような方法も全く効果のないほどすさまじいものであった。

吉村昭『戦艦武蔵』325

(一回の強いウゴキ)

n パパの瘦せた指を二本口にいれてがりがり音のするほどはげしく咬みながら、あたしは、パパンカ死二ナサイ、死ンデシマイナサイ、と叫びました。

倉橋由美子『聖少女』474

o 黒人兵は、僕の腕を痛みのために痺れるほど強く握りしめたまま、不意に狙撃されるおそれのない壁の隅に入りこみ黙って坐りこんだ。
大江健三郎『飼育』238

2・3 数量詞をとるホド

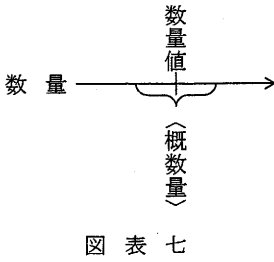
数量詞十ホドは、奥津(一九八〇・七)が指摘するように、数量詞のみの場合と同じく、数量詞移動(quantifier floating)が可能であるなど、数量詞と同じ振舞いをする。

(30) a 学生が二十人ほど集まった。

b 学生二十人ほどが集まった。

c 二十人ほどの学生が集まった。

ただ、数量詞のみの場合は、当該数量丁度を表わすのに対して、数量詞十ホドは当該数量前後のうちいずれかの値であることを表わすが、このようなおよその数量のことを「概数量」と呼ぶことにしたい。



たとえば、次の(31) a ~ c などがそのような用例である。

(31) a ここには何しろバラの扇面だけでも柳行李やなぎざしに一杯ある
始末だから、とてもみんな見切れなかったが、それでも
四日間に二百五十点ほど見た。(「数」)

小林秀雄「真贋」 404

b 私は駐車場から車を出し、途中で深夜営業のスーパー
マーケットをみつけて、缶ビールを二本とウイスキーの
ポケット瓶びんを買った。そして車を停めてビールを二本の
み、ウイスキーを四分の一ほど飲んだ。(「量」)

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 643

c それで私は彼女のとなりに並び、約束の時刻に八分か
九分ほど遅れたことを詫わびた。(「時間」)

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 38

確かに、このような数量詞十ホドの用例は多く見出されるが、このような用法は、これまでのホドの用法と構造的に異なっているように見える。すなわち、これまでのホドは、YがXホドAという構造をとっていたが、数量詞十ホドの場合、Yは対象、Xは数量を表わすとして、評価述語Aが存在しないように見える。しかし、数量詞の場合、Aは「多い/少ない」を典型とする多少、大小を表わす評価述語に限定されており、また、数量詞に含まれる助数詞がさらに個数か、分量か、重量か、長さか、広さかなどを明示している。したがって、評価述語Aはしばしば冗長で情報量の少ないものになりやすい。とはいっても、評価述語Aが表現されることはな

いかというと、以下のように数量詞十ホドノ十評価述語または評価基準（「評価述語||評価基準十プラスまたはマイナス評価」と考える）という表現も少なからず見出される。

(32) a 我々はお互いを結びつけたロープをずっと短かくし、五十センチほどの距離を保てるようにした。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1090

b 私が別の曲を思いついているあいだに、我々は下水道に行きあたった。下水道とはいっても、それはただの太いコンクリートのパイプにすぎない。直径は一メートル半ほどでその底を二センチほどの深さで水が流れていた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1118

c 足の下は堅く平らな岩盤になっており、その少し先を幅二メートルほどの川が流れていた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』76

d 冷凍庫の中の冷凍食品も同じ運命をたどった。一ダースばかりの凍った海老と牛フィレ肉のかたまりとアイスクリームと最高級のバターと三十センチほどの長さのあるすじこ作りだめしておいたトマト・ソースが、隕石群がアスファルト道路にぶつかるような音をたててばらばらとリノリウム貼りの床に落ちた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』516

e 私はひっくりかえった机を傷の痛みに耐えながらもと

に戻し、その上に金庫の中身を一列に並べた。ゴムバンドのかかった五センチほどの厚さの預金通帳の束があり、株券や証書のようなものがあり、現金が二百万か三百万あり、布の袋に入ったずしりと重いものがあり、黒革の手帳があり、茶封筒があった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』664

f それからもなお同じ方向にまわしつづけていると、クローゼットの壁の右下の部分が縦横七十センチほどの大きさにぼつかりと開いた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』716

g 中にひとつどうしても使い方のわからない不思議なものをした爪切りがあったので、私はそれを選んでカウスターに持っていった。それはのっぺりとした五センチほどの長さのステンレス・スティールの金属片で、どこをどう押さえれば爪が切れるのか想像もつかなかった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1293

h 留置場は三メートル四方ほどの広さで、奥の壁に高窓があり、廊下に向いた方は太い木の格子になっていた。

石川達三『青春の蹉跌』470

i 腰をにかけている岩は二疊敷ほどの大きさで、以前はこの岩とすれすれに大きな赤松の幹が立っていた。三十間ほどの高さであった。

井伏鱒二『黒い雨』153

j 鮎太は庭へ出て、渡された箒を持って、庭を掃いた。

庭は二百坪ほどの広さを持っており、それを全部掃くのは容易なことではなかったので、鮎太はこれは大変なことになったと思った。 井上靖『あすなる物語』78

k 川の側は林が続き、川と一緒に左へ左へとそれて行っていた。前は一 秆キョイトルばかり草原が砂丘のように、ゆるやかに起伏した果てに、岩を露出した別の丘が、屏風びよぶのように立ちふさがっていた。そして私とその丘との中央に、草が半町ほどの幅で燃えていた。人はいなかった。

大岡昇平『野火』39

数量詞でなくても、同様の表現が存在する。

(33) a 洞窟の天井はかがんで歩かなければならないほどの低さだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』723
b 穴の直径はだいたい五十センチから七十センチといったところで、とびこえるか脇わきをまわりこむかして簡単に通過することができた。私ためには近くにあってたこぶしほどの大きさの石を中に落としてみたが、どれだけ待っても何の音もしなかった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』729
c やみくろたちがその岩塊のまわりにねじ山のようにらせん状にきざみこんだ階段も、階段と呼ぶにはいささかやくざすぎる代物しろものだった。不揃ふぞろいで不規則で、やっと片足を置けるほどの幅しかなく、ときどき一段ぶんなくな

っていたりもした。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』852
d 床にあるもののおおかたはスーツケースか鞆かばんだった。中にはケースに入ったタイプライターやテニス・ラケットのようなものもあったが、それは例外的な存在で、部屋のスペースの大半は大小様々の鞆によって占められていた。おおよそ百はあるだろう。そしてその鞆はどれも宿命のともいえそうなほどの量のほこりに覆われていた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』806
e 懐中電灯で足場をたしかめながら歩いていると、いやでも蛭の群をじつと眺めることになった。そこには気の遠くなりそうなほどの数の蛭がいた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』836
f 男は首を振って邪魔ではないことを示し、それから僕に向つて円柱についた葉書ほどの大きさのガラス窓を指さした。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1009
g 彼女の手が暗闇の中で思いきり私の頬ほを打った。一瞬耳が遠くなつてしまうほどの激しさだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1093
h 指先のごこえるほどの寒さが、三月に入つてもなおしつこく、月のなかばすぎまでつづいたが、

石川淳 「処女懐胎」 480

i 半月ばかり見ないうちに、家々は最早冬籠の用意、

軒丈ほどの高さまじしに毎年作りつける粗末な葦簾の雪がこい
がすっかり出来上つていた。 島崎藤村『破壊』 369

j この広ッ場ばでも目の及ぶ限り芥子粒けしつぶほどの大きさの売
菓の姿も見ないで、時々焼けるような空を小さな虫が飛
び歩あ行いいた。 泉鏡花「高野聖」 28

k そのじせつになるとちゃんと秋の風が吹く。魚屋はみ
とれるほどの美しさ。 林芙美子『放浪記』 682

このように、評価述語あるいは評価基準がなくても、数量詞の場合には、評価基準は容易に復元することができる。そのような経緯で、特に数量詞を中心として、評価述語Aのな表現が多く用いられるようになったものと思われる。ただし、評価基準は明らかでも、しだいにプラスあるいはマイナス評価は必ずしも明らかでない、ニュートラルな表現も多く用いられるようになっていく。

以上の考察は、数量詞に跳ね返ってきて、幾分厄介な問題を惹き起こす。

(34) a 学生が二十人集まった。

b 学生二十人が集まった。

c 二十人の学生が集まった。

ここで、数量詞「二十人」は、「若い」「勤勉だ」のような述語と同じように、「学生」に対して述語付けをしているの

か、あるいはこの場合、「学生」は「学生の人数」の一種の省略と了解されて、「学生の人数」と「二十人」とが同数であると述べているのだろうか。そのようなことはどちらでもよさそうに思われるかもしれないが、もし前者であれば、ここでこだわって問題にしている評価述語あるいは評価基準は、数量詞には関わりがないことになる。

(35) a 「学生は二十人だ」(学生|主語—|述語|二十人)

b 「学生の人数は二十人だ」(学生の人数||二十人)

ここでは、理論的な指摘をするに留めておくが、「学生」は「若い」とか「勤勉だ」とかの属性を持つことはできないのに対して、「二十人(だ)」という属性を持つとは考えられない。そうではなく、ある時ある所に「学生が集まった」というその場限りの出来事に関与した「学生」の人数が「二十人」であったということである(このことは井島(一九九一・三)で論じた)。であるとすると、後者の解釈をとらなければならぬことになる。すなわち、ホドを伴わずに、数量詞だけの場合にも、評価基準(この場合は「人数」)が潜在していると考えられることになる。

2・4 期待との対照を表わすホド

ホドには否定節の中で用いられるものが多く見られる。

YハXホドAナイあるいはXホドAモノハ(ホカニ)ナイ

のように、ホドが否定節の中で用いられる類型がある。YハXホドAナイは、Aというスケール上で高程度の対象Xに対してYがそれに及ばないこと、すなわちYはたいしてAではないこと、XホドAモノハ(ホカニ)ナイは、Aというスケール上でX以上にAの程度の高い対象が存在しないこと、すなわちXが最もAであることを意味することはすぐに知られよう。いずれの場合も、XはAというスケール上で高程度であることは共通している。

(36) a 安田の北海道旅行は、いかにも、後から調べられることを予想したような手が歴々^{かきり}と打つてあつた。《まりも》の車内で北海道庁の役人と会つたのもそうだが、一番いちじるしいのは、河西を札幌駅に出迎えさせたことだ。

河西にきくと、それは駅に呼びつけるほどの急用ではなかつたというのだ。 松本清張『点と線』340

b 研修生は懸命に烏口を磨き、磨き上げたものを机の上に並べて影村教官の検閲を待った。そうするのが影村の製図の時間の風習だった。木村の磨き方は悪かつたには違いないが、ことさら木村だけが叱られるほど悪くはなかつた。 新田次郎『孤高の人』68

c 窓から富士山によく似た山が見えた。彼がそれまでに調べたところによると、その山は有明富士に違いないのだが、有明富士だと決めてしまうほどの自信もなかつた。 新田次郎『孤高の人』300

d 加藤はアルコールランプに火をつけコップで湯を沸かして、その中へ特別注文して作らせた餅^{もち}とひとつかみの甘納豆をいれた。普通の三分の一ほどの大きさの薄い餅だった。焼く必要はなく、湯に入れるとすぐ食べられれた。おしるこによく似ていたがおしるこほど甘くはなく、勿論^{もちろん}雑煮でもなかつた。 新田次郎『孤高の人』1168

e しかし人間は偶然を容認することは出来ないらしい。偶然の系列、つまり永遠に堪えるほど我々の精神は強くない。 大岡昇平『野火』319

f 「おまえ、あんな雑誌を読んでいるのか。」「え、読んでいるってほどでもないんですけれど……」 山本有三『路傍の石』645

g 「おまえ、何か聞いたことでもあるのか。」「いいえ、聞いたってほどのことでもありませんが、玉岡先生に会つたら……」 山本有三『路傍の石』692

h 多くの懐疑家は外見に現われるほど懐疑家ではない、また多くの独断家は外見に現われるほど独断家ではない。 三木清『人生論ノート』43

i しかし、政治道楽と派手な外観を尊んだ基一郎には、実情を知つた家族の者が一驚したほどその資金がなかつた。 北杜夫『楡家の人々』552

(37) a 父は決して現実の金閣が、金色^{こんじき}にかがやいているなどと語らなかつた筈だが、父によれば、金閣ほど美しいも

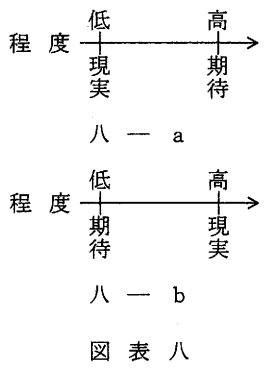
のは地上になく、また金閣というその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであった。
三島由紀夫『金閣寺』5

b 名譽心と虚栄心とほど混同され易いものはない。しかも両者ほど区別の必要なものはない。

三木清『人生論ノート』78

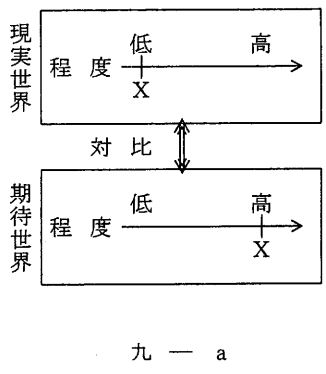
ちなみに、安達(二〇〇五・一〇)では、ホドが否定文中に用いられた場合、三つの類型に分けられるという。第一は、「ほど」節が否定のスコープの内部にあるもの、第二は、「ほど」節が否定のスコープの外部にあるもの、第三は「ほど」節が文末に否定が来ることを要求するものであるという。すなわち、第一類は、「YハXホドA」ナイというつくり、第二類は、YハXホド「Aナイ」というつくりの表現のことである。また、第三類は、次に見る(38)、(39)、ホドが「思う」「予想する」「期待する」などをとるものである。このうち、第二類は、(36)i一例しか挙がっていないが、実際に用例は僅少である。(36)a~hはいずれも第一類のものであるが、あえてこのような否定表現をとるのはなぜであろうか。ここでナイによって打ち消される「YハXホドA」は、相手の、読者の、社会一般の「期待」を表していると考えれば、その「期待」を打ち消して「現実」にはどうであるかを示すのが、この構文の働きであると了解される。その場合、程度の高い「期待」を打ち消して「現実」は程度が低いことを述

べる場合と、逆に程度の低い「期待」を打ち消して「現実」は程度が高いことを述べる場合とがありうる。

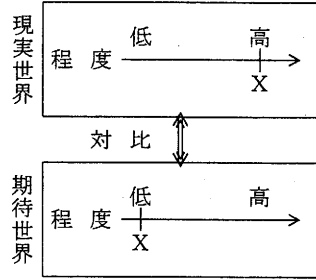


図表八

この関係を、単一のスケール上に示すのではなく、期待世界と現実世界とに分けて書き直すと次のように示すことができる。



図表九



九 — b

このように、ホドが用いられるのは、話し手が予想した・期待した程度を表わすためであると思われる。実際(38) a ~ i のように、「思った(ほど)」「期待した(ほど)」という表現がしばしば見出される。

(38) a 私がいよいよナオミを引き取って、その「お伽噺の家」へ移ったのは、五月下旬のことでしたらう。這入って見ると思ったほどに不便でもなく、日あたりのいい屋根裏の部屋からは海が眺められ、…

谷崎潤一郎『痴人の愛』43

b だが、この計画も、思ったほど順調には搬んでくれなかった。
安部公房『砂の女』142

c 私は有為子の顔がこんな美しかった瞬間は、彼女の生涯にも、それを見ている私の生涯にも、二度とある

まいと思わずにはいられなかった。しかしそれが続いたのは、思ったほど永い時間ではなかった。この美しい顔に、突然、変容が現われたのである。

三島由紀夫『金閣寺』30

d ロスアンゼルスは思ったほど暑くなかった。風は生暖かく感じられるが、汗が出るというほどではない。

沢木耕太郎『一瞬の夏』276

e 「ああ、脳の神経はべつに傷んでいない。君ねえ、これは君自身思っているほど悪くはないということですよ。…」
北杜夫『榆家の人々』234

f 徹吉は、奥さんのは心気症というもので、ご自分で考えているほど心配すべきものではないのだ、と答えた。

北杜夫『榆家の人々』751

g 自分が選択を誤ったこと、ナオミは自分の期待したほど賢い女ではなかったこと、——もうこの事実はいくら私のひいき眼でも否むに由なく、彼女が他日立派な婦人になるであろうと云うような望みは、今となつては全く夢であつたことを悟るようになったのです。

谷崎潤一郎『痴人の愛』123

h 感激は予期したほどなかった。なにぶん桃子は性急な期待を持ちすぎ、いい加減待ちくたびれすぎたもので。

北杜夫『榆家の人々』385

i 海も黄色く、にごっていた。深呼吸をしてみたが、ざ

らつくばかりで、予期していったほどの味はしなかった。

安部公房『砂の女』 456

(39) a ~ c は、否定文にはなっていないが、ホド節の方が「予想とは違つて」「期待を裏切つて」「意外に」というように、予想・期待と裏腹であることを示す表現となつてゐる。

(39) a 試験官の一人は老人で、もう一人はこんな若い人が：

…と思うほど若い男だった。石川達三『青春の蹉跌』 287
b 康子は楽しそうに笑つた。笑うと、意外なほど可愛い笑筈ができた。 石川達三『青春の蹉跌』 311

c 肩に肉がつき、体にはつよい敏感な線がでていたが、ライトに焼けた肌理は意外なほど荒んでいた。 開高健「巨人と玩具」 245

また、井本(二〇〇〇・八)にも指摘されているように、指示語+ホドに注目してみると、コレホド・アレホドは指示内容を明らかに示すことができる場合がほとんどであり、また主文の述語は多くが肯定形であり、否定形となる場合も特にコレホド・ソレホドがあるために否定形となつたようには感じられない。

(40) a 靴のゴム底が水をはねる音が舌なめずりのようにあたり響き、それにかぶさるように電車の音が近づいては去つていった。地下鉄の進行音がこれほど嬉しく感じられたことは生まれてはじめてだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 1120

a マスタードは上物だったし、レタスはしつかりとしていたし、マヨネーズも手作りが手作りに近いものだった。これほどよくできたサンドウィッチを食べたのはひさしぶりだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 155
b 「昔よりずつと道が悪くなつてるわ」と彼女は言う。

「この前来たときはこれほどひどくなかつたのよ。もう引き返した方がいいかもしれない」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 398

c クローゼットの奥には前に見たときと同じように暗闇が広がつていたが、やみくろの存在を知るようになったせいだ、それは以前よりも深く冷やかに感じられた。これほどまでの完璧な暗闇というものにはまず他ではお目にかかれない。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 690

d 私はライトでもう一度レリーフを照らしてから彼女の後を追つた。やみくろたちがこんな完璧な暗闇の中であれほど精緻なレリーフを彫ることができたということ、私にとつてちよつとしたショックだった。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 737

f 「色魔！いるかい？」堀木が、また自分の所へたずねて来るようになっていたのです。あの家出の日に、あれほど自分を淋しくさせた男なのに、それでも自分は拒否

できず、幽かに笑つて迎えるのでした。

大幸治『人間失格』167

それに対して、ソレホドの場合は、(41) a・bのように、指示内容を持ち、主文述語も多く肯定形となるソレホドがある一方で、多くのソレホドは(42) a～hのように、明確な指示内容を持たないように見え、主文述語は原則として否定形となっている。ここでソレは明確な指示内容を持たないように見えるとは言つても、ソレホドという形で何らかのスケール上の値を示していることは疑いようがないように思われる。ここでソレによって指示されているのは、聞き手、読者、あるいは世間一般に期待される程度なのではないだろうか。すなわち、ここで用いられているソレホドは、その場において、その文脈において、「あなたが思う」程度、「読者が予想する」程度、「多くの人が考える」程度に実際は達していない、ということを表わしているように思われる。このようなソレホドの用法も、ホドが期待内容を受けるものであると考えられる。

(41) a 翌日、私は彼女が私の貸した地図を手にして、早速私の教えたさまざまな村の道を一とおり見歩いて来たらしいことを知った。それほど私の助言を素直に受入れてくれたことは、私に何んとも言いようのない喜びを与えた。

堀辰雄『美しい村』100

b 彼の妻は、死後再婚し、はじめて前の夫が天才だった

と聞かされて、驚いた。それほど彼女は幸福であった。彼の妻への愚劣な冗談が誠意と愛情に充ちていたからである。

小林秀雄「モオツアルト」79

(42) a 女が私に向つて何かを言つたが、唇の動かし方が速すぎて、読みとれなかつた。「もう少しゆっくりしやべつてもらえないかな。読唇術はそれほど得意な方じゃないので」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』68

b 「影はひきはがされたあとどのくらい生きるものなのですか?」「影にもよるね」と老人は言つた。「元氣な影もいれば、そうでないものもある。しかしひきはがされた影はこの街ではそれほど長くは生きられん。……」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』282

c 官舎という名前のおり、かつては官吏たちがこの地区の住人であつた。それほど地位の高い官吏ではなく、かといつて下級職員でもない中級の地位に就いている人々だつた。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』288

d 「どんな仕事?」「コンピュータ関係」と私は答えた。仕事を訊かれたとき、私はいつもそう答えることにしている。だいたいのラインとしては嘘じゃないし、世間の大抵の人はコンピュータ・ビジネスについてそれほど深い専門知識を持っているわけではないので、それ以上つ

つこんだ質問をされずに済む。

e 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』306
彼女は首を振った。「あそこはあなたが考えているよりずつと危険な場所なの。あなたにはあまりに近づいたりすべきじゃないのよ。行く必要もないし、行ってもそれほど面白^{おも}いところじゃないわ。なぜあんなところに行きたがるの？」

f 村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』394
しかし、たとい山本が名を名のつたとしても、彼の名前は、未だ部内にそれほど知れわたってはいなかった。

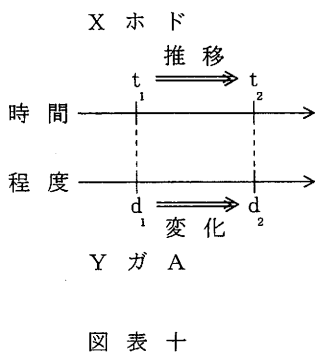
g 阿川弘之『山本五十六』284
「新しいのを買つとかなくちや駄目ですよ」と山本は言うのだが、ほかの煙草のみの客の話では、官邸の葉巻はそれほど「駄目」になっているわけではなかったそうである。

h 阿川弘之『山本五十六』310
山本五十六は、なり立ての海軍次官ではあったが、永野を強力にバック・アップして、陸軍の解散論に正面から反対した。永野自身は、必ずしもそれほど強腰ではなかったように思われる。

2・5 漸層用法

ここで問題にしたい漸層用法も、YガXホドAという構造

に関して、これまでの用法と共通している。しかし、この場合これまでのようにホドが単純に「程度」を表わしているとは言えない。「次第に」「段々」「ますます」などの副詞が表わすような漸層的变化を表わしており、「くにつれて」とおよそ言い換えられるような意味を表わす。



図表 十

(43) この用法は、典型的には次のように、時間的な推移に伴って、何らかの程度が変化していくことを表わす。

a 工場長は僕の倍くらい飲んで、飲めば飲むほど青ざめて被服支廠の笹竹中尉の従来^{しん}の遣りくちをこきおろした。

井伏鱒二『黒い雨』631

b 老人は血眼になって、王手、王手と攻め立てたが、彼がむきになって追い立てるほど、王様はかえって広いところへ出て行ってしまった。山本有三『路傍の石』908

c 要するに、対五国同時作戦など、言うべくして行い得ざる戦いであり、突きつめて見て行けば見て行くほど、結局めぐりめぐって、アメリカと戦争することは出来ないうという、同じ結論が出て来るのであった。

阿川弘之『山本五十六』 76

d こんなことでは、明日の仕事にさしかえる。明日は夜明けと同時に起きて、まる一日を有効につかうつもりだ。寝ようとすればするほど、かえって気が立ってくる。

安部公房『砂の女』 76

e 頂上に近くなるほど風が強くなった。突風性の風も混っていた。

新田次郎『孤高の人』 1505

f このアパートの人たち皆に、自分が好意を示されているのは、自分も知っている、しかし、自分は、どれほど皆を恐怖しているか、恐怖すればするほど好かれ、そうして、こちらは好かれると好かれるほど恐怖し、皆から離れて行かねばならぬ、この不幸な病癪を、シゲ子に説明して聞かせるのは、至難の事でした。

太宰治『人間失格』 166

g カルメンを殺したドン・ホセは、憎めば憎むほど一層彼女が美しくなるので殺したのだと、その心境が私にハッキリ分りました。

谷崎潤一郎『痴人の愛』 454

しかるに、次のような空間的移動に伴った、程度の変化を表わすような場合も見出される。

(44) a 塔は四角形の石造りで、それぞれが東西南北の方位を示し、上の方に行くほど細くなっている。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 123

b 「…そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集って見えしたがって白くぼんやり見えるのです。この模型を、ごらん下さい。」

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』 291

c そうして築山から出て行くと、門のところを駆け寄って広島市街の方を見た。煙は上空たかく昇って、上にならぬほど大きく広がっていた。

井伏鱒二『黒い雨』 33

ここでは、対象YがAというスケール上でXという値をとる、というホドの基本的な用法をもとに、時間的推移、空間的移動などに伴ってYが少しずつ変化するにつれて、値Xも変化していくのをストロボ写真のように重層的にとらえたものが、この漸層用法である、と了解しておく。

3 ナド・ナンカ・ナンテ

3・1 ナドの基本的意味

ナドの基本的用法は〈例示〉と呼ばれるが、同じく〈例示〉用法を持つデモ・ダツテとはその働きが異なる。第一に、複

数の例を列挙する場合、デモ・ダツテは「AデモBデモCデモ」のように個々の例にデモが添えられるが、ナドは「A、B、Cナド」もしくは「Aヤ、Bヤ、Cナド」のように例をひとつかたまりに挙げた最後にナドが一つ添えられる。第二に、そのことは意味の違いにも反映され、デモ・ダツテの個々の例は原則として「または」の関係であるのに対して、ナドの個々の例は「かつ」の関係である。第三に、さらにその意味は文全体の意味類型とも結び付いており、デモ・ダツテは希望、意志、命令、意向質問などの非実現事態に用いられるのに対して、ナドは多くは事実の叙述・描写といった実現事態に用いられる（デモ・ダツテの意味機能に関しては井島（二〇〇七・三）で論じた）。

(45) a 「足利義満は西園寺家の北山殿を譲り受け、ここに大規模な別荘を営んだ。その主要建築は、舍利殿、護摩堂、鑑法堂、法水院などの仏教建築と、宸殿、公卿間、会所、天鏡閣、拱北楼、泉殿、看雪亭などの、住宅関係の建築とであった。…」 三島由紀夫『金閣寺』40

b 郡視学が校長に与えた注意というのは、職員の監督、日々の教案の整理、黒板机腰掛などの器具の修繕、又は学生の間に行する「トラホム」の衛生法等、主に児童教育の形式に関連した件であった。島崎藤村『破戒』34
c 二人は文壇の話や、自分達の仕事の話や、読んだ本の話などをした。武者小路実篤『友情』25

d やがて、ひたいや、こめかみや、くちびるなどに、何かべろするものを感じた。山本有三『路傍の石』183
e その町はむかしビルマの王様の離宮のあったところでした。入江のほとりに白い壁の家が群がって、なかば水につかかって、影をうつしています。めずらしい形をした丸屋根、鐘楼、尖塔などが空にそびえています。

竹山道雄『ビルマの竖琴』7
f 「秋の月」や「からたちの花」や「野ばら」などは、いずれも私たちが子供のときから口ずさんでいる、いい節の歌です。竹山道雄『ビルマの竖琴』45

g 山峡の赤い岩の陰に、二三十人ほどの人と、五六頭の馬の死骸が散乱していました。もうすっかりかさかさになって、白骨がつきでています。そのあいだに、機関銃や、小銃や、皮の袋などがなげだされています。竹山道雄『ビルマの竖琴』325

h 指導課程に組み入れられる者は、訓練課程には編入されなかった。まだなにを学ばせてよいか判らない少年達で、事務、農芸、電気、機械などの科目を順次に実習させ、その結果、少年達の個性に応じて一科目を専修させるのであった。立原正秋『冬の旅』247

i 店がひらくのは午後六時で、閉店は晩方の四時である。この間にこの店にあつまる人種は、テレビタレント、流行歌手、映画俳優の卵などである。

j 村の川岸、スキイ場、社など、ところどころに散らばる杉木立が黒々と目立ち出した。

川端康成『雪国』 94

k 山の案内書には、登路、日程、宿泊所、費用などが、簡単に書いてあるだけで、反って空想を自由にしたし、

川端康成『雪国』 169

l それは杉林に続く丘の中腹で、窓の直ぐ下の畑には、大根、薩摩芋、葱、里芋など、平凡な野菜ながら朝の日を受けて、それぞれの葉の色のちがいが初めて見るような気持であった。

川端康成『雪国』 174

m 海水着だの、タオルだの、浴衣だのが、壁や、襖や、床の間や、そこらじゅうに引っかけてあり、茶器や、灰皿や、座布団などが出しっ放しになっている座敷の様子
は、いつも通り乱雑で、… 谷崎潤一郎『痴人の愛』 358
n 波止場には煙草屋だの、両替店、待合所、なんかが並んでいる。

林芙美子『放浪記』 454

このことは、いわゆる「準体機能」「副機能」の相違、すなわち構文要素内(典型的には名詞句の内部)で機能するか、構文要素同士が結び付いて文を構成する段階で機能するかの違いである。この問題に関しては、次節でさらに追求したい。

ナドに(軽視・謙遜)の用法があることは、すでに山田(一九〇八・九)にすでに指摘がある。(例示)という基本的な意味から、(軽視・謙遜)が派生する経緯については、川村(一九八三・六)で提起された(任意的例示)という概念が有効である、すなわちどれでもよければたいして重要ではない、ということになり、(軽視・謙遜)の意味につながる、ということもすでによく知られている。その後、加波(一九九五・四)では、(任意的例示)に加えて、「話し手の否定的感情」も必要であるという指摘もある。また、植田(一九九一・五)、加波(一九九五・四)などでは、ナドと格助詞の相互承接のしかたと、それが表わす意味との関係を詳細に議論している。さて、(軽視・謙遜)のナドと呼ばれるのは以下のようなものである。

(46) a こんな風に見られていることを、葉子は気づくはずがなかった。彼女はただ病人に心を奪われていたが、たとえ島村の方へ振り向いたところで、窓ガラスに写る自分の姿は見え、窓の外を眺める男など目にも止まらなかつただろう。

川端康成『雪国』 16

b しかし老人たちは雪のことなど気にもとめない様子で穴を掘りつづけていた。彼らはまるで雪が降りだすことなどはじめから承知していたといわんばかりの様子だっ

た。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1141

d 何しろ歯並びがいいところへ声楽の素養があったので
すから、その声だけを聞いてみると実に綺麗で、素晴ら
しく英語が出来そうで、私などはまるで足元へも寄りつ
けないように思いました。 谷崎潤一郎『痴人の愛』107

e 知ったか振りをしたがるナオミは、所謂エチケット
なるものを聞きかじって来て、無理に私に紺の背広を着
せましたけれど、さて来て見ると、そんな服装をしてい
る者は二人ぐらいで、タキシードなどは一人もなく、
あとは大概変わり色の、凝ったスーツを着ているのです。

谷崎潤一郎『痴人の愛』227

f その重役は、六、七、八、と三カ月間五百円の約束で来
借り、七月一杯は居ただけけれど、もう鎌倉も飽きて来
たから誰でも借りたい人があるなら喜んで貸す。杉崎女
史の周旋とあれば家賃などはどうでもいいと云っている
から、……と云うのでした。 谷崎潤一郎『痴人の愛』343

g 姉や兄貴は勿論詫りに行けと云う、「あたしは決して
詫りになんか行くもんか。誰か荷物を取って来てくれる」
と、ナオミは何処までも強気に出る。そして殆ど心配な
どはしていないように、平気な顔で冗談を云ったり、気焰
を吐いたり、英語交りにまくし立てたり、ハイカラな衣
裳や持ち物などを見せびらかしたり、まるで貴族のお嬢

様が貧民窟を訪れたように、威張り散らしていやしない
か…。

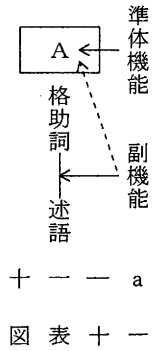
谷崎潤一郎『痴人の愛』472

h 自信がなくなると仕方のないもので、目下の私は、英
語などでも到底彼女には及びません。

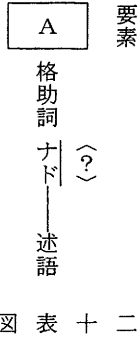
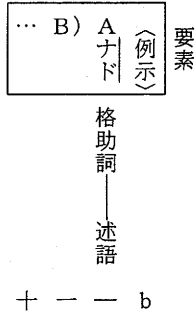
谷崎潤一郎『痴人の愛』628

ここで、ナドには、(軽視・謙遜)とは逆に(高評価)す
るもの、(不明確)あるいは(婉曲)に提示するものなども
あり、(任意的例示)、「話し手の否定的感情」などだけでは、
さまざまな用法を十分に説明することができない。それらも
合わせて説明することが求められる。

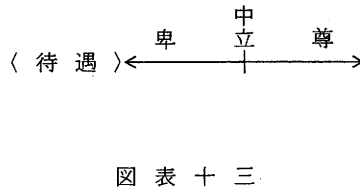
ところで、格助詞は、名詞を中心とする構文要素に下接す
ることによって、格成分を構成し、格成分は述語と結びつい
て文を構成するということは、大局的には認めてよいことだ
ろう。すなわち、格助詞の前に承接するか、後に承接するか
によって、機能が大きく異なるということも、若干の留保を
付けて認めることができるだろう。すなわち、格助詞の前に
承接するということは構文要素の中で働くこととなり、格助
詞の後に承接するということは文の構成に関与するというこ
とになる。かつて、「準体機能」「副機能」と呼ばれた機能は、
まさにこのようなことであった。



これをナドに当てはめると、〈例示〉という機能は、多数の要素の中から他の要素を推測させるものをサンプルとして取り出したものであるから、「準体機能」の方に該当する。同様に、サンプルの複数列挙も、要素内のことと了解できる。ちなみに、クライ・ホドには、格助詞が上接する例はほとんど見出しがたく、格助詞と承接する場合には、およそ格助詞は下接することになる。すなわち、クライ・ホドは原則として準体機能しかないということになる。



そのような機能を本来とするナドが、格助詞の後に承接して「副機能」を担わせようとした場合、どのような意味が生ずることになるだろうか。ここに適用されるのは尊卑の対立をもとにした〈待遇〉(ポライトネス)スケールであると思われる。〈待遇〉スケールは、待遇的にニュートラルな点を中心に、〈尊／卑〉両方向に広がるスケールである。



〈待遇〉には様々な要因が関わっている。歴史的に見ても、連体・主格格助詞ノが尊でガが卑であったことはよく知られているが、その理由については必ずしも明らかではない。また人称代名詞についても、一人称「私」「僕」などは卑から尊へと〈待遇〉が上昇しているが、二人称「あなた」「お前」「君」などは尊から卑へと〈待遇〉が下落していることはよく知られている。対話の場においては、相手を持ち上げ、自

分はへりくだるといふ原則（「相手は尊／自分は卑」原則）が働いていると思われるが、内心はその逆で、自分は大切、相手は二の次という原則（「自分は尊／相手は卑」原則）が働いており、歴史的な変遷には後者が影響してくることを示唆しているのだろう。前者は表（立て前）の原則、後者は裏（本音）の原則と言うことができるだろうが、具体的な発話の場を検討する場合に関わってくるのは前者の方である。

その他にもさまざまな原則が働くものと考えられるが、ナドが表わす（例示）の意味と関わる原則には次の二原則があるのではないだろうか。

・「唯一は尊／複数は卑」原則： たった一つしかないものは重要であるが、複数存在するものはそれほど重要ではない。

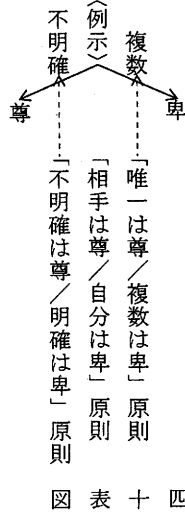
・「不明確は尊／明確は卑」原則： 尊ぶべきもの、畏れ多いもの、恐ろしいもの、不吉なもののはつきりと言わないが、そうでないもののはつきり言つて構わない。

前者は、いろいろなコレクションでも珍しいものが珍重されたり、沢山いるときは乱獲された動物も、激減すると絶滅危惧種と言つて保護しようとする心性なども関わっているだろう。後者は、ある程度の普遍性はあると思われるが、特に日本では強い原則であるようで、中古に用いられたメリなどの臚化・婉曲表現もそうだが、先の二人称の「あなた」「お前」も直接相手を指さないとところから生じたと言われる。

この二つの原則が、ナドとどう関わるかという点、ナドの持つ（例示）の意味の特徴として、例示されるくらいだから当該対象は複数存在するはずであるし（ナドの意味そのものが〈複数〉でないことは山田（一九〇八・九）が強調したところであるが）、例示されるだけでは実際にどのような対象を指すのかは必ずしも明確ではない。すなわち、〈例示〉は、〈複数〉と〈不明確〉という意味と結び付いている。ただし、山田（一九〇八・九）が当時ナドを「複数」の副詞調とする研究が少なくなかったことを承けて、それを批判したが、このことは逆に言えば〈例示〉は〈複数〉という意味との方が結び付きやすいことを示唆しているのだろう。いずれにせよ、この二つの意味は、〈待遇〉スケール上では、反対の働きをする。すなわち、〈複数〉の意味は「唯一は尊／複数は卑」原則が働いて〈卑〉側に、〈不明確〉の意味は「不明確は尊／明確は卑」原則が働いて〈尊〉側に対象を位置付けることになる。

具体的には、まずナドがつく対象が自分（側のもの）か、相手（側のもの）か、あるいはどちらでもないかによつて、「相手は尊／自分は卑」原則が働く素地があるわけである。そこにナドがつくことによつて、自分（側のもの）あるいはどちらでもないもの場合は、「唯一は尊／複数は卑」原則の発動を許し、〈卑〉と表現あるいは解釈され、相手（側のもの）の場合は「不明確は尊／明確は卑」原則の発動を許し、

〈尊〉と表現あるいは解釈されるものと思われる。ここで、〈例示〉は〈複数〉の方が相対的に結び付きやすいことからも、どちらでもないものは〈卑〉と表現あるいは解釈されることが原則である。従来、この〈卑〉の意味は「軽視・謙遜」と呼ばれてきたが、自分(側のもの)が「謙遜」で、どちらでもないものが「軽視」にあたる。



ちなみに、中西(一九九五・一〇)では、中西が(低評価)を表わすと考える、ナド(ナンカ)とクライとを比較して、(47) aではナンカ(ナド)は用いられるがクライは用いられないのに対して、(47) bではナンカ(ナド)もクライも用いられることに注目して、以下のように議論する。

(47) a 私は部長にお茶くみなんか/*くらしいしないでいいと聞かされた。

b お茶なんか/くらしいれてくれと言われればいれる。

(47) aは「部長」のその場限りの発話であるのに対して、(47) bは話し手のその場限りの思いとも常日頃考えていることと

も解釈できる。後の場合、「お茶(をいれること)」はたとえば「ドリップ式コーヒー(を入れること)」などと比べて簡単なこと、たいたことないことと評価していると考えられる。そこで、ナド(ナンカ)が表わすその場限りでの〈低評価〉を「一時的低評価」、クライが表わす序列上での〈低評価〉を「一般序列的低評価」と呼んでいる。

クライについては、第1節で論じたように、〈評価〉スケール上で働いて、潜在的に他の対象との比較の上で一般的に〈低評価〉と位置付けられるということであるから、特に異論はない。ただ、ナド(ナンカ)に関しては、この場合、単に「評価」が低いというだけではなく、「お茶くみ」という仕事を卑しめているニュアンスが感じられる。また、〈待遇〉という働きは、ここでは〈待遇〉の「スケール」という言い方を用いたが、他の対象との比較という意味合いは特にない。むしろ、「スケール」と呼ばず、当該対象を、待遇的にニュートラルな位置に対して〈尊〉または〈卑〉と、三段階にデジタルに位置付ける機能である、と言った方がよいかもしいない。それから、〈待遇(ポライトネス)〉は、発話の場面で働く語用論的な概念である。そのような意味では、その場限りの一時的な「評価」であると言うこともできるだろう。このように、クライとナドとをいずれも同じ〈評価〉スケール上で働く表現とは考えず、クライは〈評価〉スケール、ナドは〈待遇〉スケール上で働く表現であると区別する方が妥当

ではなからうか。

ナド・ナンカに関してはおおよそ以上のように論じることができそうであるが、ナンテについては、さらに用法に広がりがあるようである。磯山(二〇〇〇・三)は、特にナンテについて、全体を「係助詞的用法」(これを「提示」と呼ぶ、本稿の第3・1節、例示用法と第3・2節、待遇用法)と「格助詞的用法」(これを「内容を示す」という、本稿の第3・3節、引用の補文標識用法)とに分け、そのうち前者は、この(軽視・謙遜)用法に相当するが、これをさらに以下の八つに分類する。すなわち、①提示+例示、②提示+軽視、③提示+重視、④提示+比較、⑤提示+皮肉、⑥提示+敬遠、⑦提示+述部強調、⑧提示+意外性の八つである。このうち基本用法である①提示+例示を除くと以下のようなものがそれにあたる。

(48) a 「名前なんて、記号みたいなものじゃないか。きみの

宏一の一字をとり、宏太郎なんてつけてもいいだろう」

② 軽視

立原正秋『冬の旅』184

b 「女なんてそんなもんだ」と栄二が云った、「撫でた

手でつねるし、つねった手で撫でるようなことをする、

そしてどっちもすぐに忘れちまうんだ、——少しはおち

ついたか、さぶ、もうここいらで帰ってもいいだろう」

② 軽視

山本周五郎『さぶ』14

c 「はははは、おカンなら、わたしが見てやるんだった

な。——しかし、おまえが酒を買ってくるなんて珍しい

な。」 ③ 重視 山本有三『路傍の石』950

d 「毛皮の着物なんてカッコイーツ！」と思いがながら、

一万円を五十枚、熊の毛皮の男にわたした。③ 重視

井上ひさし『ブンとブン』38

e 「むかしは家にもラジウム風呂なんてのがあったっけ。

あの大きな……。だがとにかく、湯というのはいいもの

だな」 ④ 比較

北杜夫『楡家の人々』1980

f 「内臓は悪くない筈だから、只、僕、今日、こんなカ

サブタだらけの顔してるだろう。だから、あんまり知らない

店に行くのいやなんだ。変な病気だと思われて、追い

払われると困るからね。昔から顔なじみの支配人のホテ

ルに行つて、そこ一番上のグリルで食べると気楽なん

だけど」「いいね、オレ、レストランなんて所へ行つた

のは……」 ④ 比較

曾野綾子『太郎物語』1159

g 「これ、なんだかわかる？」と、彼女は一抱えもある

ような古くなって黄ばんだ丸い物体を指して小鼻をうご

めかすのである。「駝鳥の卵よ。これでオムレツを作つ

たら何十人前もできんのよ」「駝鳥の卵なんておいしい

の？」 ⑤ 皮肉

北杜夫『楡家の人々』291

h 「父さん、僕は善意の悪つて、悪意の悪よりずっと始

末に悪いと思うよ。だから僕は善人なんて嫌いだ。神さ

まみたいな奴なんて信じない。……」 ⑤ 皮肉

i 「お笑いぐさだな」と彼は自嘲じちやうするように云った、「こんなときに風邪をひくなんて」
⑤皮肉
山本周五郎『さぶ』149

j 「大賛成だね。茶の精神けんしんなんてのは、權威主義けんいから解放された本当の自由人にしか、わかるもんじやない」
⑥敬遠
曾野綾子『太郎物語』95

k 両親は太郎の興味をとくに禁じようとしなかったが、父は、「考古学かうこくがくなんて、しよせん、一生キャンプして土方するんだから。トロイの遺跡いせきを掘り当てたシュリ―マンなんぞ、例外中の例外だ」というのである。
⑥敬遠
曾野綾子『太郎物語』87

l 「暑いね、まったく……こう暑くつちや、シャツなんて、とても着ちやいられない。」
⑦述部強調
安部公房『砂の女』107

m 「ディスコの社長がどう言ったかは知らないけれど、負けた方がいいなんていうことは、絶対にない。少なくとも、俺はそう思わない。やっぱり、勝つべきなんだ。それしかないんだよ」
⑦述部強調
沢木耕太郎『一瞬の夏』236

n 「おめえが」とその頭が云った、「——このお店たなへ因縁いんねんをつけた来た野郎か」「冗談じやんたんじゃない、因縁だなんて」
栄二はおどろいて吃くもった、「あつしはただ旦那だんなに会わし

てもらって」
⑧意外性
山本周五郎『さぶ』173

o 「安心して涙なみだが出たんですか。おかあさま」「変です
ねえ。うれしくても、悲しくても涙がでるなんて」
⑧意外性
三浦綾子『塩狩峠』215

これらもナド（ナンカ）と置き換えて置き換えられないことはないが、どこかしつくりこないものも多い。このうち、
②提示＋軽視、③提示＋重視、④提示＋比較、⑤提示＋皮肉、
⑥提示＋敬遠はここで論じた（軽視・謙遜）用法の中に解消できそうであるが、⑦提示＋述部強調、⑧提示＋意外性は第3・4節、評価用法に近いものと考えた方がよいかもしれない。
い。

3・3 引用の補文標識用法

中古語では、ナドはトと同じく引用の補文標識として用いられたが、現代語にもそれは引き継がれている。ただし、ナド単独ではなく、ナドトと引用格助詞トを伴わなければならぬ点は、副助詞化が進んでいるためであると了解できる。しかも、トだけの場合と異なつて、多かれ少なかれ（例示）的な意味合いが加わっているものばかりである。すなわち、会話文・心内文を複数例示しているように見えたり、他にもいろいろ言ったり思ったりしたことを推測させるような例がほとんどである。

a 「私が悪いんじゃないわよ。あんたが悪いのよ。あんたが負けたのよ。あんたが弱いよ。私じゃないのよ。」
 などと口走りながら、よろこびにさからうためにそでをかんでいた。
 川端康成『雪国』55

b 小学校、中学校、自分が学校から帰って来ると、周囲の人たちが、それ、おなか为空いたろう、自分たちにも覚えがある、学校から帰って来た時の空腹は全くひどいからな、甘納豆はどう？カステラも、パンもあるよ、などと言つて騒ぎますので、自分は持ち前のおべっか精神を發揮して、
 太宰治『人間失格』13

c 商売人は、ニセ物という言葉を使いたがらない。ニセ物と言わないと気の済まぬのは素人で、私なんか、あんたみたいにニセ物ニセ物というたらどもならん、などとおこられる。
 小林秀雄『真贋』380

d 母は別に感動した様子も見せなかった。ただ「へえ、やっぱり同なじ病気でね。御気の毒だね。いくつで御亡くなりかえ、その方は」などと聞いた。

夏目漱石『こころ』187

e 「アリバイは有るようだね」と刑事は静かな口調で言った。「しかしそれならば、なぜ大橋登美子なんていう女は知らないと言ったんだ。なぜ近頃つきあつていなくなつたなどと嘘をついたんだ。なぜ逃げようとするんだ。なぜそんなに青い顔をしたり、ひや汗を流したりするん

だ。……」

石川達三『青春の蹉跌』468

f 「どうしてお母あ様の行方が知れないのだろう、若し役人なんぞに任せて調べさせて、自分が捜し歩かぬのを神仏かみほとけが憎んで逢わせて下さらないのではあるまいか」
 などと思おもいながら歩いている。 森鷗外『山椒大夫』324

g 余りに異う二人が親しくなったのを見ると、人が「氣が合うと云うのは不思議なものだ」などと云つた。
 志賀直哉『赤西蛸太』93

h 「御苦労でした」と工場長が云つた。みんなも口々に「御苦労さまでした」「有難うございました」などと挨拶した。
 井伏鱒二『黒い雨』293

この他に、ナドトの用例でも、ナドトイウ十名詞という構成のものは、引用の補文標識となつていないが、これはトイウ十名詞の低位類型と考えた方がよからう。

ここに見たようなナドトの働きは、ナンテと共通する⁴⁾。

そもそも、ナンテはナドトの変化したものであると言われているので、それは当然とも言える。一方、ナンカは、引用の補文標識として用いることは不可能ではないように思われるが、用例はほとんど見出すことができない。

(50) a 江藤の合格は、法学部の学生たちの間にたちまち知れわたつた。「おい、良かったな。このあとは何だ。論文か。いつだい。八月か」「七月はじめだ」「もうすぐじゃないか。頑張がんばれよ。自信あるかい」「無いね」「大丈夫だ。

やれやれ。お前は合格するよ。……なんて、無責任なことを言いやがる」

石川達三『青春の蹉跌』212

b 稲葉屋のおじさんは、たいへんいいおじさんで、「君にはこれがいいだろう。」とか、「今度、こういうのがきたよ。」なんて言つて、「世界おとぎばなし」や「少年世界」なんかを、どんどん貸してくれた。

山本有三『路傍の石』18

c 「何でもいいじゃありませんか、怒つて私が菓子折を海へ投げ捨てたからつて、貴方に家を出てくださいなんて云うんじやありませんもの。私はそのうち又ひとりで東京へ帰ります。」

林芙美子『放浪記』320

d 「あの子は、喜んで転校しますよ、なんて言つてるけど、今、世間で、そんなことなざるお宅ないわよ。高校二年生にもなつて転校するなんて。それも、二月とか三月とかなら、新学期から編入の方法もあるかも知れないけど、四月二十日になつて動けやしませんよ」

曾野綾子『太郎物語』67

この用法に関して、磯山(二〇〇〇・三)は、①内容を示す十例示、②内容を示す十断定回避、③内容を示す十軽視の三つの用法が見られると論じているが、これは、第3・1節、第3・2節で論じたナドの用法と、トの引用の働きが複合したものだとして了解することができる。

3・4 評価用法

しかるに、ナンテには、ナドトにはない用法も発達させている。すなわち、「事実内容」+ナンテ+「評価表現」という構成をとる用法である。後ろの「評価表現」は、省略されることもあるが、「事実内容」+ナンテ。の後に、強い情意の潜在を感じさせる表現となる。

(51) a 「なあんだ、もういまにも花が咲きそうになってから、そんなことを白状するなんて！じゃあ、どうせあいつも……」

堀辰雄『風立ちぬ』175

b 「いいえ、わたしは今、お金はいりません。どうか、うちのたしにしてください。」まあ、おまえがそんなことを言うなんて……やっぱり、他人さまのところには、行つてみるものね。……」

山本有三『路傍の石』377

c 「そんな意地わるしないで、貸してくださいよ。」何が意地わるよ。小僧のくせに新聞よむなんて、ぜいたくだわ。」

山本有三『路傍の石』460

d 教師の話が終わると、多くの生徒は拍手をした。吾一はあつげにとられていた。教室で拍手をするなんて、彼には思いもよらないことだったからである。

山本有三『路傍の石』618

e まあ、月給が弁当つき三十五円なんて！何とすばらしい虹の世界だろう……。三十五円、これだけあれば、私

は親孝行も出来る。

林芙美子『放浪記』 328

f 『ああ、シグナルさんもあんまりだわ、あたしが云えないでお返事も出来ないのを、すぐあんなに怒っておしまいになるなんて。あたしも何もかもみんなおしまいだわ。…』 宮沢賢治「シグナルとシグナレス」 160

g 「猫、まだこりないのか。」ゴージュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴージュが云いました。 宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」 434

h 「おい、起きんかい。あんまり情けないやつだ。あんなにひどく難儀して、やっと都に帰って来ると、すぐ気がゆるんで死ぬなんて、ぜんたいどういふ考なのか。…」 宮沢賢治「北守將軍と三人兄弟の医者」 265

i 「ああ、まりちゃんか。でも、何の風の吹きまわしなの、あたいを訪ねてくるなんて」 立原正秋『冬の旅』 670

j 「このくらの雪に参ってしまふなんて、みつともないぞ。関東の奴等に笑われるぞ」 新田次郎『孤高の人』 1595

k 「そ知らぬ顔をして、あんなふうには挨拶するなんて。みんな共謀になつて居るのだわ。共謀になつて、あたしを陥れようとするんだわ」 北杜夫『楡家の人々』 364

この評価用法は、引用補文標識用法の延長上に位置付けられるように思われる。すなわち、引用にも「ト思フ・言ウのように思考動詞、言語行為動詞に連なる直接的な引用と、「ト驚ク・威カスのように当該発話を伴う間接的な引用とが存在するが、前者が引用補文標識用法、後者がこの評価用法にあたると言えるかもしれない。

3・5 感動表現用法

ナンテに特有で、ナド・ナンカにはない用法として、もう一つ、程度副詞的に用いられて感動を表わす用法がある。常に後に形容詞・形容動詞などの状態述語を伴い、程度の甚だしいことを表わすのであるが、通常の程度副詞と異なるのは、何らかの状況に際会してその場で催した感動を吐露するような場合に限って用いられるという点である。

感動文については、山田(一九〇八・九)で提示された「感動喚体」の議論以来、そこで設定された考え方に従って、議論をたどることができる。近年も、大鹿(一九八八・一一、八九・一二)、安達(二〇〇二・一二)、笹井(二〇〇五・九、〇六・一)などを挙げることができる。およそ、感動文は、感動を惹き起こす事態を判断を加えることなく素材として提示するものであるために、基本的に体言化された形で実現化されるということを、その主張の骨子としている。笹井(二

〇〇六・一)は、「美しい花」型のいわゆる「感動喚体」を感動文のA類とし、もう一つ「なんと美しい花だろう」型をB類と呼ぶが、ここにナンテと並んでナンテも用いられる。このB類は、一見普通の述語を持つ文(「述体」)のように見えるが、状態述語と体言を要する点で、A類と共通する性質を持っている。

確かに、ナンテの用例に限っても、ナンテ+状態述語+名詞+タロウという形を典型として、ナンテ+状態述語+名詞、ナンテ+状態述語+コト、ナンテ+状態述語連体形といったヴァリエーションを含みつつも、状態述語の存在と体言(化)はおよそ備わっている。

(52) a そのとき私はこう思ったの。世界って、なんて不思議なものだろうってね。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』779

b しかし、いささかでも、美醜に就いての訓練を経て来たひとなら、ひとめ見てすぐ、「なんて、いやな子供だ」と頗る不快そうに吹き毛虫でも払いのける時のような手つきで、その写真をほうり投げるかも知れない。

太宰治『人間失格』5

c たちまち帯子はぱつとわたしの膝の上に突っ伏し、爪を立ててわたしの腿をつかんで、からだを波打たせてすすり泣きはじめた。「なんて、根性まがりな、罰あたりな帯子。…」

石川淳「マルスの歌」196

d 「…死んでるひとのところへお金借りに行くなんて、まあなんてみすぼらしい、みじめな……そのみじめさのために、さっきあの硝子戸の前から逃げ出したのかと思うと、そのためだけで冬子を見捨てたのかと思うと、もしそうだったらと思うと、こわくってこわくって、足がぞくぞくしちやった。…」

石川淳「マルスの歌」197

e 「ちくしょうッ！なんて横柄な野郎だ。国鉄職員と電力会社の職員ほど横柄な奴等は、ほかにいないだろうな」

立原正秋『冬の旅』313

f 誰も彼もが、このおとなしい、目鼻立ちのよい赤子を抱きたがった。「ほんとに、なんて可愛らしい。なんてまあ可愛らしい。ほら、このお口、このお手々」と言いたがった。

北杜夫『椋家の人々』598

g 「……下つ端は駄目よ。相手にされない……誰れも相手にしてくれない……踏みつけられるだけ……なんて、なんて不幸な……」

北杜夫『椋家の人々』840

h 「御免なさい、御免なさい、あなた……」なおも夢中になって繰返しながら、同時に、桃子の小さな頭脳の一部は、ひとつのことを考え、いらだち、憤激していた。

……遅い、なんて遅い、なんてまあ遅いこと。手術の用意はまだできぬのだろうか？本当に運が悪かったのだ。何もかも運が悪かったのだ。北杜夫『椋家の人々』861

i 「……あなたは、なんて、なんて優しいんでしょ！

……うちは、楡つて家は、本当に怖ろしい、つめたい、血も涙もない家なんだけど、……その家に、一体どうして、どうしてまたこんなに優しい子が生れたんでしょう？」

北杜夫『楡家の人々』1091

j 「情けないね。なんて皆、勇気がないんだらう。私が学生だったら、断然、上って行って消してやるわ。私は高い所平気なんだから」

曾野綾子『太郎物語』653

k じつとりと首筋の汗ばむのが不快だった。「なんて暑いだらう」

三浦綾子『塩狩峠』387

l なんて美しい男性だらうと、七瀬はつくづく思った。

筒井康隆『エディプスの恋人』398

ただ、ここで本稿の問題関心からは、感動文の構造ではなく、ここにどうしてナンテおよびナンテが用いられるのか、ということが気にかかる。その理由について、明言はしにくい、ナンテもナンテも、語源的に引用格助詞トを含んでいることと関わっているように思われる。ナンテ・ナンテは、ともに状態の程度が高いという点では、程度副詞と共通する面がある。しかし、そこに一種の感動が伴う点、それと関わって、眼前の状況に誘発された感興を表現するような場面ではか用いられない点が、一般の程度副詞とは異なっているということとは先に指摘した。第3・4節で見た引用用法、あるいは第3・5節で見た評価用法の延長上に位置付けて、眼前の状況をいわば一種の引用として提示して、それに対して惹

起される情意を表わす表現ととらえることはできないだろう。たとえば、「なんて、美しい花だらう」は、「眼前に花が美しく咲いている状況」ナドトイウコトハ、（実は大変）美しい花デアルコトヨ」のように理解することができるのではないだろうか。

ここで、ナンテにはないが、ナンテには実は状態述語を欠くナンテ+コトという用法が存在する。

(53) a 「あたしは……はじめは……この人を決して嫌いじゃなかったのだ。それにしてもお父様は……ひどい……なんてことを……なんてまたひどいことを……」

北杜夫『楡家の人々』423

b 「とんでもございません、桃さま。なんてことをおっしゃる。……」

北杜夫『楡家の人々』827

c しばらくすると、背中の早瀬は私をはねのけようとして私の脇腹を乱打した。立ち上ると、他のひとり私の胸ぐらをとった。「阿呆。なんてことをするんだ。」

三浦哲郎『驢馬』505

ただ、これらも発話の文脈によって、どのような状態によって感動が誘発されたのかが補われると考えると、潜在的には状態述語は存在すると言ってもよからう。

文の意味にはほとんど寄与することなく、対話の中で何らかの働きをする談話標識(discourse marker)の一つとして、ナンカがある。しかしこの用法も、元来は文中で機能していたものからの派生と考えられる。副助詞ではないが、副助詞のナンカと同じく、「何か」から派生したものとして、「何かはよくわからない、知らないが」、「何か今は思いつかない、考えていない、思い出せないが」といった意味合いを表わし、文中では格成分となる名詞句(主語、目的語など)、その他の名詞句と同格のものとして、あるいは副詞的に働くものがある。

(54) a 吾一はみんなが動きだしたのをしおに、「おら、まっすぐ行くよ。」と言いつ放つて、彼らのあいだから抜けてしまった。そして、ひとりきりで、いっさんに学校のほうへ走って行った。背中、なんか声が入っているようだった。

b あんまり静かなので、意味はちつともわからないが、おつかさんの柔らかい声が、ほのかに耳をなでていると、吾一はなんかいい気もちだった。

c 「そ、そんなことは聞かないでおくれ。わたしが悪かったんだよ。何もかも、わたしが悪かったんだよ。」お

山本有三『路傍の石』64

店で、なんかひどいことをしているんですか。」

山本有三『路傍の石』393

d 吾一のために、何かよいことがあるのであろうか。それとも、いつもの気まぐれなのか、あるいは吾一を種にして、なんかよくないことでも、たくらんでいるのではないだろうか。

山本有三『路傍の石』392

e 「ところで、と……」黒田はなおおことばを続けた。「おまえのかどに出にあたって、なんか祝ってやりたいんだが、弱ったな。……」

山本有三『路傍の石』533

f 「なんと書いてあったかね」やはり黒が訊いた。「なんか難かしいことが書いてあったよ。厚子にはわかったらしいが、俺にはさっぱりわからん」

立原正秋『冬の旅』841

g 「弁護士来よつてん」「なんか余罪ばれたんちやうか」高志がたずね、同じ房で威勢よかつたサクライ、二週間前にかくしとつた殺しがばれてここをひつたてられていったから当然の質問。

野坂昭如『プアボーイ』390

h 「ブンチン」(これは文鎮のこと。文鎮をただ文鎮という名で売ろうというのだから、べつにふしぎでもなんでもないが、なんかへんである)

井上ひさし『ブンとフン』164

これらの用法も、文の実質的な意味とは乖離し始めているとは言え、文によって表わされている内容に不明確、不確定

な部分があるという点では、いまだ文中で機能していると考
えられる。

しかるに、恐らくこのような用法がさらに進んで、近年多
く見られるようになった談話標識のナンカが派生したように
思われる。談話標識のナンカは、出現位置も、同格句として
名詞句の前とか、副詞句として述語の前のような制限を受け
ることはない。それどころか、文という範囲さえ越えて、対
話においてやり取りされる一続きの発話の中において、さま
ざまな位置に現われ、その位置によって働きが異なるもの
ようである。ただし、このような用法は、口頭の対話の場
において近年多く見られるようになってきたものであって、小
説類にはあまり用例を探すことはできない。(『新潮文庫の一
〇〇冊』には、この用法が見られる作品は次の一点しかなか
った)。

(55) a 「なんか、バニーガールみたいなやつらしいんだ。客
の隣に坐ったり、いろんなことをしなくていいというん
で……」

b 「内藤、とても疲れているように見えるんですが、ど
うしたんでしょう。大丈夫でしょうか。なんか、痩せて
しまつて……」

c 「やめたら」私は断定的な口調で言った。「……そん
なのを着て出ることはないよ」「そう思う？俺も、なん
か厭なんだ」

沢木耕太郎『一瞬の夏』 546

d 「なんか……危ないから……」「危険だつて？」う
ん、なんか、そんなこと言つてたな、エディさん」

f 「選んでいるうちに、なつかしくなつちやつてね。御
飯も食べないで、レコードを聴きだしちゃつたんだ。そ
うしたら、なんか気分がすつきりしちゃつてね。……も
う、大丈夫」

談話標識用法は、出現位置の相違と並行して、その機能も、
文の意味内容とは次元を異にした、談話の場に求めなければ
ならない。まずは話し手自身のための機能として、発話の順
番(SEQ)の取得のため、「えー」「まあ」「そのー」などと同
じように会話のつなぎ(HEG)として間合いをとるためなど、
あるいは聞き手に対して、「何か」の持つ不明確、不確定の
意味合いの延長として、話し手の主張内容の曖昧化、婉曲化
のためなど、さまざまな機能が考えられる。

このような分野の研究は、従来の語学研究ではあまり顧み
られなかったが、社会学系の会話分析などが盛んになるにつ
れ、近年頃に増加の傾向にある。このような研究が従来のもの
と異なるのは、言葉の意味や文法的規則に頼ることはでき
ず、もっぱら実際の会話の観察から、なんらかの法則性、機
能を探り出していかなければならないことである。現在のところ、
さまざまな分析が提出されてはいるものの、いまだコ
ンセンサスは得られていないように思われる。

以上、これまで見てきたさまざまな用法は、ナド・ナンカ・ナンテ（・ナゾ・ナンゾ）に同等に見られるわけではなかった。最後に以上の用法の存否を表にまとめておく。ナゾ・ナンゾも含めて表示するが、これらに関しては用例も示していない。これらは現代語ではほとんど用いられず、用法もおよそ例示用法と待遇用法に限られているようである。

	ナド	ナンカ	ナンテ	ナンゾ
例示用法	○	○	○	○
待遇用法	○	○	○	○
補文標識用法	○(ナド)	×	○	×
評価用法	×	×	○	×
感動表現用法	×	×	○	×
談話標識用法	×	○	×	×

五 十 表 図

おわりに

これで、副助詞の代表的な三類、すなわち(対比・限定系)のハ・ダケ・バカリ・シカ(ナイ)(井島(一九九二・三))、(並列・添加系)のモ・サエ・マデ・デモ・ダツテ(井島(二〇〇五・一、〇五・三)、〇七・三))と、(程度・例示系)の

クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテ(・ナゾ・ナンゾ)(本稿)について、通して論じることができた。わずかに残されたコソ・キリなどおよび(対比の)ハやモについての議論の不十分な点を補いつつ、副助詞全体に対する見直しを改めてつけることが今後の課題である。

注

1 このことは、従来「スコープ」と呼ばれているが、否定辞のスコープがいわば「影響の及ぶ範囲」という意味で用いられるのに対して、クライの場合、低く評価される部分そのものであるという意味で、否定辞で言えばむしろ「焦点」にあたりそうであるが、この点は沼田(一九八六・四)にもすでに言及がある。しかし、否定辞の場合、「スコープ」は「焦点」と対になる概念であるのに対して、クライの場合、これを「スコープ」と呼ぶにせよ、「焦点」と呼ぶにせよ、対にして用いられる概念ではない、という点で、否定辞のスコープ/焦点と対応するものでもない。さらに、情報構造における前提/焦点とも異なる概念であることは言うまでもなく、混乱を避けるために同一の呼称を用いるべきではない。

2 山田(一九〇八・九)には、すでに「(イ)おのれなどはさることなし。(ロ)おのれどもはさることなし。の二例に於いて如何なる感じを読者に与ふるか。(イ)は傲慢不遜の感を与へ、(ロ)は謹慎謙譲の意を具するにあらずや。これ一は自己を例として示したるにて、一は自己を多数の一にかぞへたる差なり。この故に複数を示

すにあらぬことは論なきなり。」という指摘が見られる。また、川村（一九八三・六）は、「マウントバッテンなどという戦争屋は、歓迎宴をポイコットしてみせたり、妙なスタン・ド・ブレイを繰りかえしたりしたものです。」という例文について、「著者はマウントバッテンをナドに伴わせることにより卑しめているが、この効果を可能ならしめているのは、ナドの〈任意的例示〉という意味特徴である。すなわちことばの世界では、この人物はその存在を指定された「その他の戦争屋たち」の中から、著者による何らかの価値判断も経ずに、たまたま例としてとり出されたに過ぎず、無条件に「その他の戦争屋たち」の各成員とさし換えられうる存在なのである。」と論じた。さらに、植田（一九九一・五）の調査でも、ナドが格助詞と承接するときには、まず形態的に、複数要素の後にはナド＋格助詞しか用いられず、格助詞＋ナドは単数要素の後にはしか用いられない、また意味的にも、〈例示〉の意味を持つのはナド＋格助詞の場合だけであって、格助詞＋ナドは〈軽視・謙遜〉の意味にしかない、ということが示された。それらを受けて、加波（一九九五・四）では、「話し手が、否定的感情を当該の事態に対して持っている時には、取るに足らないと思っている事態が成り立つ条件として、設定された範囲の中から、無作為に抽出された存在が核の語であり、いつでも他の要素と交換可能であることから、「軽視・謙遜」のニュアンスが生まれてくるものであると思われる。」として、格助詞とナドとの承接の仕方の異なる各類型ごとに検討を加えている。

3 磯山（二〇〇〇・三）は、特にナンテについて、全体を「係助詞的用法」（これを「提示」と呼ぶ、本稿の例示用法と待遇用法）と

「格助詞的用法」（これを「内容を示す」という、本稿の補文標識用法）とに分け、そのうち前者をさらに以下のように分類する。

①「提示＋例示」…ある事物をいくつかの同類のものの中から話題として取り上げる。背景には、その事物以外にも、同類の他の事物が容易に想定される。事物はいくつか並立された方が「例示」のニュアンスが強くなるが、一つでも構わない。

②「提示＋軽視」…ある事物を話者の軽視の念を込めて、話題として取り上げる。その事物が人間である場合には軽蔑、その人物が話者や話者の親類などである場合には謙遜を表す。

③「提示＋重視」…ある事物を話者の重視の念を込めて、話題として取り上げる。これはその事物が話者や話者の親類などである場合、尊大を表す。

④「提示＋比較」…ある事物を他の事物と比較して、話題として取り上げる。つまり、例えば「ある事物なんてAだ」という場合、ある事物を個別に見ただけでは「ある事物はAだ」とはいない。しかし、ある事物よりも程度の劣った他の事物と比較してみると、「ある事物は、比較的Aだ」という意味を示す。

⑤「提示＋皮肉」…敢えて①④の用法の中に分類するとすれば、

②「提示＋軽視」の中に分類されると思われる。なぜならば、話者あるものを軽視しているからである。しかし、②の用法とこの用法の相違は、この用法の場合、一般的に軽く扱われるようなものでは

ない事物が取り上げられているということである。しかし、話者はそれを軽く扱っているように見せるため、話者の皮肉と解釈されるのである。

⑥ 「提示＋敬遠」… 敢えて①～⑤の用法の中に分類するとすれば、

③ 「提示＋重視」の中に分類されると思われる。なぜならば、話者はある事物を重視しているからである。しかし、③の用法とこの用法の相違は、この用法の場合、一般的にそれほど重く扱われる存在でないものを話者が一般的評価以上に重く扱っているということである。したがって、この用法の場合、ある事物は近づきがたい、または近づきたくないという話者のニュアンスをこめて提示される。

⑦ 「提示＋述部強調」… この用法は、①～⑥の用法と性質が異なる。①～⑥の用法は、すべて「なんて」に前接する事物に対し話者が何らかの評価やニュアンスを含めており、各用法の相違はその提示の仕方の相違であったが、この用法の場合、むしろ述部の判断を強調している。提示の仕方としては、中立的に提示しており、「ハ」に近い働きをなす。

⑧ 「提示＋意外性」… 「なんて」の後ろは省略され、終助詞的に用いられる。ある事物は「意外である、驚きである、あまりにも信じ難い」という話者の判断を込めて、話題として取り上げられる。

さらに、その事物がプラスの内容である場合には、話者の気持ちは「意外なことが起きて嬉しい」となり、その事物がマイナスの内容である場合には、「意外なことが起きて失望的だ」となる。

4 磯山(二〇〇〇・三)は、本稿の引用の補文標識用法を以下の三

つに分ける。

① 内容を示す＋例示… 次に来る動詞を一つ又はいくつかの例を挙げて示す。したがって、背景には例として取り上げられたものの以外に、動詞の内容を示すものが容易に想定される。例はいくつか並立された方が「例示」のニュアンスが強くなるが、一つでも構わない。

② 内容を示す＋断定回避… 次に来る動詞の内容をそのものずばと言わず、「その周辺のこと」というニュアンスを持たせ、婉曲的に示すことによつて、内容の断定を回避する。①の用法が「などと」に近い意味を示すのに対し、この用法は格助詞「と」に非常に近い意味を示す。

③ 内容を示す＋軽視… 次に来る動詞の内容を、話者が軽視して示していることを表す。これらの用例は一見②の用法のようにも解釈できるが、②の用法の場合「なんて」を「と」に置き換えてもある内容が明確に示されるか、婉曲的に示されるかだけの相違であるが、この用法の場合、「なんて」に前接する内容に対する話者の判断が相違する。

5 管見に入った限りで、談話標識用法のナンカに関する研究には以下のようなものがある。

鈴木(二〇〇〇・三)では、ナンカの働きを、意味論的機能、語用論的機能、談話調整的機能に分けて論ずるが、そのうち談話標識用法は後二者に相当する。ここで production format とは、E・コフマンが話し手(speaker)と呼ばれていた役割を、音声を発する animator、表現する語彙を選択して文の形に組み立てる author、伝達される心

情や感情を有する *principal* に分解し、それらの総称として用いられたものだという。

◎語用論的機能

1 production format の変化を予告・強調する「なんか」

1・1 伝聞表現に呼応する「なんか」

1・2 婉曲表現に呼応する「なんか」

1・3 過去表現と共に起する「なんか」

2 否定的な意見を暗示する「なんか」

2・1 相手と食い違う意見を暗示する「なんか」

2・2 否定的な内容の意見を暗示する「なんか」

…不確実性・不確定性の標識としての機能から派生

◎談話調整機能

…発言権を確保したり維持したりする機能

内田(二〇〇一・三)は、「現代日本語の会話に見られる、代名詞や副助詞と異なった「なんか」は、後ろに聞き手にとって新しい事柄 (new concept) を伴う前置きのデイスコースマーカーである。」という仮説を立て、「前置き表現」のナンカを「話題開始」「話題の発展」「発話内容の具体化」「次の部分へのつなぎ」「引用」「話題対象への評価」の六つに分類する。そして、デイスコースマーカーのナンカの文法化の過程を以下のように想定する。

代名詞「なんか」

↑

「不明確な事柄を後に従える」という意味を類似として

持ち込む (メタファー的關係)

↑

propositional: 不特定な事柄や事柄や事態を明示する

↑ 副助詞「なんか」

「取り立て」の意味を部分として持ち込む

(メトニミー的關係)

↑

textual: 後続の発話全体を不明確なものとして際立たせ、直前の内容につなげる

※デイスコースマーカー「なんか」…「話題開始」「話題の発展」

「話題内容の具体化」「次の部分へのつなぎ」

↑

expressive: 後の新たな事柄に対する話し手の態度や判断などを暗に含む

※デイスコースマーカー「なんか」…「引用」「話題対象への評価」

鈴木(二〇〇五・二)では、ナンテ・ナンカを「使用意図」によって以下のように分類する。①「曖昧化目的」、②「感情表出目的」、

③「話題提示目的」の3種とする。①は、その情報の不確かさ故、あるいは内容が言葉どおり解釈されることを避けるため、意図的に発話をぼかす・曖昧化する目的で当該形式を使用したもの、②は積極的に感情や評価を表出することを目的として使用したもの、③は、それを話題とすることに主眼が置かれたものとする。

飯尾(二〇〇六・三)は、ナンカの出現位置(節頭、節中、節尾)

と、強弱によって以下のような用法の相違が見られるとする。「第一に、節頭において強形の「なんか」は、次の発言は自分の番であることを他の話者に知らせるマーカーあるいはきつかけの役割をしているということ。節頭の弱形で使われる時は、強形の場合ほど強い意志は感じられないにしても、前話者の意見の補足や同意的な意見を述べる時のきつかけとなっている。」「そして第二に、節中に弱形で使われる「なんか」は、この言葉が頻繁に使われる一番の理由を占めている。(中略)全ての「なんか」のうちの7割近くを占めるこの「なんか」は主につなぎ語(Miller)の役割をしたり、発言を和らげる役割(softener)をしている。」「第三番目に、節尾の弱形の「なんか」であるが、これは曖昧に会話を終わらせる時に使用されていた。「くだ」と言いきって発話を終えるのではなく、フェイドアウトさせながら終るのに「なんか」は便利な言葉なのかも知れない。」

資料

赤川次郎『女社長に乾杯!』・阿川弘之『山本五十六』・安部公房『砂の女』・有島武郎『生まれ出づる悩み』・小さき者へ・有吉佐和子『華岡青洲の妻』・石川淳『葦手』・処女懐胎』・「かよい小町」・「マルスの歌」・石川達三『青春の蹉跌』・泉鏡花『高野聖』・五木寛之『風に吹かれて』・井上ひさし『ブンとフン』・井上靖『あすなる物語』・井伏鱒二『黒い雨』・遠藤周作『沈黙』・大江健三郎『飼育』・大岡昇平『野火』・開高健『裸の王様』・「パニック」・「流亡記」・「巨人と玩具」・川端康成『雪国』・北杜夫『榎家の女々』・倉橋由美子『聖少女』・小林秀雄「モ

オツアルト」・「眞贋」・沢木耕太郎『一瞬の夏』・志賀直哉『赤西蛸太』・島崎藤村『破戒』・曾野綾子『太郎物語』・高校編』・竹山道雄『ピルマの堅琴』・太宰治『人間失格』・立原正秋『冬の旅』・谷崎潤一郎『痴人の愛』・壺井栄『二十四の瞳』・中島敦『李陵』・夏目漱石『こころ』・新田次郎『孤高の人』・野坂昭如『死児を育てる』・「プアボーイ」・林美美子『放浪記』・星新一『人民は弱し官吏は強し』・堀辰雄『風立ちぬ』・松本清張『点と線』・三浦綾子『塩狩峠』・三浦哲郎『忍ぶ川』・「驢馬」・三木清『人生論ノート』・三島由紀夫『金閣寺』・宮沢賢治『銀河鉄道の夜』・シグナルとシグナレス』・「セロ弾きのゴーシュ」・武者小路実篤『友情』・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』・森鴎外『山椒大夫』・山本周五郎『さぶ』・山本有三『路傍の石』・柳田国男『遠野物語』・吉村昭『戦艦武蔵』…以上CDROM版『新潮文庫の一〇〇冊』(用例に付された数字はCDROM版のページ)

参考文献

山田 孝雄(一九〇八・九)『日本文法論』宝文館
佐久間 鼎(一九四〇・四)『現代日本語法の研究』厚生閣(改訂版
(一九五二・一) 恒星社厚生閣 復刊(一九八三・一)くろしお出版)
国立国語研究所(一九五一・五)『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版
杉耶嘉津子(一九六〇・四)『源氏物語に於ける副助詞』などに就

いて『女子大國文』第十七号(京都女子大学)

根来 司(一九六七・一)「副助詞だけ・くらい・きり(現代語)」

『国文学 解釈と教材の研究』第十二卷第二号

林 巨樹(一九六七・一)「副助詞まで・など・なんと(古典語・

現代語)」『国文学 解釈と教材の研究』第十二卷第二号

長谷川清喜(一九六七・一)「副助詞ほか・しか・やら・か・ほど・

なり(現代語)」『国文学 解釈と教材の研究』第十二卷第

二号

浜田 敦(一九六七・一)「副助詞など」『国語国文』第三十六卷第

一号

森田 良行(一九六九・三)『ぐらい、ほど、ばかり』の用法』『早

稲田大学語学教育研究所紀要』第七号

武田 蓉子(一九七〇・八)「副助詞」だけ、ばかり、くらい、ほど、

きり、しか』の意義素』『国語研究』第二十一号(山形大

学)

蜂谷 清人(一九七〇・一)「日本語における助詞の機能と解釈」

副助詞 し・しも・のみ・ばかり・まで・など(だけ)〈ぐ

らい〉(ほど)』『解釈と鑑賞』第三十五卷第十三号

奥津敬一郎(一九七五・一)「形式副詞序説―『タメ』を中心として

―』『人文学報』第百四号(東京都立大学)

奥津敬一郎(一九七五・三)「程度の形式副詞」『都大論究』第十二号

(東京都立大学)

内田 賢徳(一九七六・一一)「形式副詞―副助詞の形相―」『国語国

文』第四十四卷第十二号

関屋

浩(一九七九・八)「副助詞『など』は例示の意なりや」『田

辺博士古稀記念 国語助詞助動詞論叢』桜楓社

森田 良行(一九八〇・六)「くくらい」「くなど」『基礎日本語―意

味と使い方― 2』角川書店

奥津敬一郎(一九八〇・七)『ホド』―程度の形式副詞―』『日本語

教育』第四十一号

仁田 義雄(一九八一・一一)「数量に関する取りたて表現をめぐつ

て―系列と統合からの文法記述の試み―」『島田勇雄先生

古稀記念 ことばの論文集』明治書院

仁田 義雄(一九八二・五)「助詞類各説」『日本語教育辞典』大修館

書店

奥津敬一郎・徐昌華(一九八二・四)「日本語と中国語の比較構文―

『ホド』を中心として―』『都大論究』第十九号(『拾遺

日本語文法論』(一九九六・一〇)ひつじ書房 所収)

奥津敬一郎(一九八三・六)「統・形式副詞論―目的・理由の形式副

詞―』『平山輝男博士古稀記念 現代方言学の課題 第一

卷 社会的研究篇』明治書院

川村三喜夫(一九八三・六)『デモ・ナド』『意味分析』東京大学

奥津敬一郎(一九八六・四)「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』

凡人社

沼田 善子(一九八六・四)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研

究』凡人社

山口 堯二(一九八八・三)「副助詞『など』とその周辺」『語文』第五十号(大阪大学)

沼田 善子(一九八八・七)「とりたて詞の意味再考―『こそ』『な』について―」『論集』くろしお出版

大鹿 薫久(一九八八・一二、八九・一二)「感動文の構造―句と文についての把握―正・統』ことばとことのは』第五・六号

寺村 秀夫(一九九一・二)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版

井島 正博(一九九一・三)「数量詞の多層的分析」『山梨大学教育学部研究報告』第四十一集

村田 年(一九九一・三)『なんか』の用法①―接続の形態から―『日本語と日本語教育』第十九号

植田 瑞子(一九九一・五)「現代語における副助詞ナドの分布と特性」『日本語学』第十巻第五号

井島 正博(一九九二・三)「限定表現の多層的分析」『中央大学文学部紀要』第六十九号

広川 宜子(一九九二・三)「日本語の概数表現―初級教科書を中心として―」『言語文化研究』創刊号(東京女子大学)

丹羽 哲也(一九九二・一二)「副助詞における程度と取り立て」『人文学研究』第四十四巻第十三号(大阪市立大学)

李 妙熙(一九九三・三)「近世における副助詞『くらい』の用法について―『ほど』との比較を通して―」『国語学研究』

第三十二号(東北大学)

山中美恵子(一九九四・一二)「例示と強調」『神戸大学留学生センター紀要』第二号

今井 喜昭(一九九五・三)『など』についての「一見解」『日語学習と研究』第八十号

加波 尚子(一九九五・四)「副助詞『など』について―とくに『否定的強調』『軽視・謙遜』の意味を帯びる場合について―」『国語論叢』第二十三号(神戸大学)

于 康(一九九五・九)『など』『なか』の意味用法とその変遷』『国文学攷』第四百十七号(広島大学)

中西久美子(一九九五・一〇)「ナド・ナンカとクライ・グライ―低評価を表すとりたて助詞―」宮島達夫・仁田義雄 編『日本語類義表現の文法 上』くろしお出版

山田 敏弘(一九九五・一〇)「ナドとナンカとナンテー話し手の評価を表すとりたて助詞―」宮島達夫・仁田義雄 編『日本語類義表現の文法 上』くろしお出版

中西久美子(一九九五・一〇)「数量詞+助詞―『バカリ、ホド、クライ、モ、サエ、ト、ハ』―」宮島達夫・仁田義雄 編『日本語類義表現の文法 上』くろしお出版

張 礼忠(一九九五・一二)『ばかり』『ほど』『ぐらい』『だけ』之異同』『日語学習と研究』第八十三号

山中美恵子(一九九六・二)『とりたて』と主観性』『神戸大学留学生センター紀要』第三号

生センター紀要』第三号

丸山 直子 (一九九六・三) 「話しことばの助詞―『とか』『なんか』

『なんて』―』『日本文学』第八十五号 (東京女子大学)

長田 紀子・辻村 俊子 (一九九七・三) 『ほど』と『くらい』の用

法に関する考察』『早稲田大学講座日本語研究』第三十二

号

半藤 英明 (一九九八・二) 『係助詞の構文と情報伝達』『静岡英和女

学院短期大学紀要』第三十号

木田 敦子 (一九九八・三) 『係助詞と副助詞』『日本文学』第八十九

号 (東京女子大学)

半藤 英明 (一九九八・三a) 『限定』と『取り立て』の視座』『国

語国文』第六十七卷第三号

半藤 英明 (一九九八・三b) 『取り立て』から見た係助詞と副助詞』

『成蹊国文』第三十一号

安部 朋世 (一九九九・一〇) 『とりたて』のクライ文の意味分析』

『筑波日本語研究』第四号

井本 亮 (一九九九・一〇) 『ほど』構文の解釈と主文の有界性に

ついて―述語動詞句の動詞文類を中心に―』『筑波日本語

研究』第四号

磯山 麻衣 (二〇〇〇・三) 『なんて』の意義と用法』『昭和女子大

学大学院日本文学紀要』第十一号

鈴木 佳奈 (二〇〇〇・三) 『会話における『なんか』の機能に関す

る一考察』『大阪大学言語文化学』第九号

相馬明日香 (二〇〇〇・三) 『ギリシタン文献に見られる『ほど』『ほ

ど』について』『甲南大学紀要 文学編』第百十五号

井本 亮 (二〇〇〇・八) 「否定と共起した『指示詞+ほど』の用

法について』『筑波日本語研究』第五号

森 貞 (二〇〇〇・九) 「発表要旨」比較の基準を表す『より』

『ほど』『くらい』について』『国語学』第五十一卷第二号

井本 亮 (二〇〇〇・一〇) 「連用修飾成分『ほど』句の用法につ

いて』『日本語科学』第八号

沼田 善子 (二〇〇〇・一一) 「とりたて」金水敏・工藤真由美・沼

田善子『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店

森 貞 (二〇〇〇・一一) 「否定極性を示す『など』について』『福

井工業高等専門学校紀要 人文・社会科学』第三十四号

内田 らら (二〇〇一・三) 「会話に見られる『なんか』と文法化―

『前置き表現』の『なんか』は単なる口ぐせか?―』『東

京工芸大学工学部紀要 人文・社会編』第二十四卷第二号

丸山 直子 (二〇〇一・三) 「副助詞『くらい』『だけ』『ばかり』『ま

で』の、いわゆる(程度用法)と(とりたて用法)』『日本

文学』第九十五号 (東京女子大学)

森 貞 (二〇〇一・三) 「発表要旨」『くら』と『ほど』につ

いて』『国語学』第五十二卷第一号

森山 卓郎 (二〇〇一・三) 「近似値表示の連体詞と副詞―概数規定

類と概略副詞類―』『国語学研究』第四十集 (東北大学)

山西 雅子 (二〇〇二・一) 「いわゆる副助詞『など』の否定性につ

いて』『目白大学人文学部紀要 言語文化篇』第八号

安達 太郎 (二〇〇二・二) 「現代日本語の感動文をめぐる」『県立

広島女子大学国際文化学部紀要』第十号

前原かおる (二〇〇二・二) 「ナド句の文法的位置付けをめぐる」

連体修飾成分との異同の検討」『広島大学大学院教育学

研究科紀要 第二部』第五十号

川端 元子 (二〇〇二・七) 「程度副詞相当句(節)『Pほど』につい

て」『日本語教育』第百十四号

安部 朋世 (二〇〇三・三) 『とりたて』のナド」『鶴見大学紀要

国語・国文学編』第四十号

鈴木 理子 (二〇〇三・三) 「自然談話資料にみられる日本語母語話

者の『なんて』『なんか』『など』『小出記念日本語教育研

究論文集』第十一号

田中 聡子 (二〇〇三・三) 『くらい』の意味的特徴」『ほど』との

比較を中心に」『言葉と文化』第四号(名古屋大学)

陳 連冬 (二〇〇三・二) 「名詞に接続する『など』の意味・機能

能」明治期と現代との比較を中心に」『待兼山論叢 日

本学篇』第三十七号

石出 靖雄 (二〇〇三・三) 「漱石作品における程度表現『くらい』『ほ

ど』に注目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』

別冊第十号 (二)

李 宗和 (二〇〇四・三) 「副助詞『ナド』に関する語用論的分析」

『大正大学大学院研究論集』第二十八号

井本 亮 (二〇〇四・八) 「誇張表現としてのホド構文」『日本語と

日本文学』第三十九号(筑波大学)

井島 正博 (二〇〇五・一) 「その機能と構造 上」『武蔵大学人文学

会雑誌』第三十六卷第三号

鈴木 理子 (二〇〇五・二) 『使用意図』から見る自然談話における

『なんて』『なんか』の意味的特徴」『国文目白』第四十四

号(日本女子大学)

井島 正博 (二〇〇五・三) 「その機能と構造 下」『成蹊大学文学部

紀要』第四十号

笹井 香 (二〇〇五・九) 「現代語の感動喚体句の構造と形式」『関

西学院大学日本文学研究』第五十七卷第二号

安達 太郎 (二〇〇五・一〇) 『ほど』による程度構文と否定」『広

島女子大国文』第二十一号

陳 連冬 (二〇〇五・一) 『なぜ』と『なんぞ』の意味・機能」

『など』との比較を求めて」『世界の日本語研究 日本

語教育論集』第十五号

笹井 香 (二〇〇六・一) 「現代語の感動文の構造」『なんと』型

感動文の構造をめぐる」『日本語の研究』第二卷第一

号

飯尾 牧子 (二〇〇六・三) 「短大生の話し言葉にみる談話標識『な

んか』の一考察」『東洋女子短期大学紀要』第三十八号

水上 由美 (二〇〇六・三) 『ほど』の用法に関する予測文法的研究」

『実践国文学』第六十九号

林 千賀 (二〇〇六・三) 「ディスコース・マーカ―『なんか』の

発達—意味の漂白化— 『昭和女子大学大学院言語教育・

コミュニケーション研究』第一号

井島 正博 (二〇〇七・三) 「サエ・マデ・デモ・ダツテの機能と構

造」 『日本語学論集』第三号 (東京大学)

(い) ま まさひろ 大学院人文社会系研究科 准教授)